

(なぜか)人里の守り神になりました

sukei

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なぜか鍵山雛に転生してしまった主人公。これは、能力ゆえに人の交流が難しい主人公が、原作キャラ達と友達になろうと頑張った(?)物語である。

※2／7 日間ランキング7位……だと……。 (呆然) 評価して下さった方々ありがとうございます。

※4／15 要望があったので目次を整理しました。幕間の話のうち、ひな祭りは本編の時系列内に、バレンタイン・ホワイトデーは番外編として先頭に配置してあります。

目次

番外編

外来イベントデー in いつもの人里 | 1

仲間ができたメイドさんは機嫌がいい | 7

本編

人里の守り神……?? | 14

紅の中の日常？ | 18

紅の中の非日常 | 27

紅の後の邂逅 | 33

異変が終わったその後で | 38

3月3日の雛の受難 | 46

春までの居場所 | 53

悲しくて、春 | 58

ナイフの下にて春死なむ | 64

春の解放 | 71

妖夢の人里探訪 | 79

春を告げる | 87

番外編

外来イベントデー in いつもの人里

3月14日、人里の広場にて――

「雛様！日頃のお礼に是非受け取ってください！」

「雛様ー！これ雛様のためにがんばって作ったんだよー！」

「おう、雛ちゃん！今日はホワイトデーなんだってな！お礼に受け取ってくれや!!」

――そこそこ広い広場を埋め尽くすほどの人垣が出来上がっていた。

周りには子どもから老人まで幅広い年齢層の男性。その中心には人垣に吞まれて身動きができない『鍵山雛』。

――ちよつと、待って。

日頃のお礼って、いつも食料やらなんやらタダ同然でもらってるのはこっちなんだけど！それに、私は特段バレンタインで皆にチョコ配ったりはしなかったよね？なんでホワイトデーのお礼をもらえるの!?!私この前のバレンタインでも女性陣からチョコレート大量にもらったんですけど!?!むしろお返しする側だと思っうんですけど!!そういうばなんか既視感があるなと思ったら、取り囲む人達の性別こそ違えど1ヶ月前に同じ状況に出くわしたんだった!!!

最早雛の手では収束不可能となった一連の騒ぎは、バレンタインの時と同じく慧音が介入するまで続くこととなる。

そして、雛を含めた誰もが気づいていないが、このような事態になったそもそもの原因の一端は雛にある。

事の発端となった出来事は、今からおよそ2ヶ月前に遡る。年が明け、年始の忙しさも一段落して落ち着いてきた1月中旬。雛は阿求のいる稗田家に訪れていた。『訪れていた』というよりかは阿求に見つかって『引きずられていった』のほうが正しいかもしれないが、今では些細なことである。

そして、阿求から投げかけられた質問は、『年が明けた後にやってくるイベントはなにがあるか』。

昨年の秋に早苗たち守矢組が外から引越してきたこともあり、現在在里では幻想郷にはないイベントや習慣、料理や衣服などがちよつとしたブームになっているのだ。

ちなみに、雛が連れられてきたことにはちゃんと理由がある。『博麗大結界などのこの世界の維持しているシステムを含めた幻想郷の状況を把握し、かつ外の世界の知識をある程度持っている人妖』という人選である。むやみやたらと外の知識を幻想郷に入れてしまうと、科学が発達し恐れ減少から妖怪が衰退した外の世界の二の舞になってしまう。そこで、里中に広げる前に雛に確認をとっているのである。

また、雛が外の知識を持つていることに疑問を持つ者は一人もいない。要因は雛の友人である八雲紫にある。

鍵山雛と八雲紫が親友に近い友人関係であるのは、少なくとも人里内で知らない人はいないぐらいには知られている。そして、雛が外の知識を持つていたことが知れたとき、誰もが真つ先に八雲紫からの情報だろうと考えた。そういう訳で、雛が外の世界の知識を持つているのは「紫から外の話聞いたからだ」ということになっている。

ともあれ、そんな経緯で始まった女子会。阿求の出してくれた和菓子をつまみつつ、早速雛は会話の火蓋をきった。

「この後……となると、来月の2月14日にバレンタインがあるね。バレンタインの話をするなら、3月14日のホワイトデーの説明も必要かな」

「バレンタインとホワイトデー、ですか？」

阿求が疑問符を浮かべる。阿求の疑問に対し、雛は説明を始める。

「基本的に、バレンタインデーは女性が好きな人に親愛の表現としてチョコレートあげる日よ」

「ふむふむ、好きな人にチョコレートですね。ホワイトデーは？」

再度阿求から問いかけられる質問に対し、雛が答えた。

「バレンタインとは対照的に、男性がお礼にお菓子をあげる日ね。この二つなら幻想郷でやっても問題ないんじゃないかな」

「なるほど。男性がお礼にお菓子を贈る日、ですか」

その後、会話の話題はバレンタインで送るチョコ菓子の種類へと逸れていき、イベントの本質に話題が戻ることとはなかった。

己の知識が少しズレて伝わっていることを、説明した雛は知らない。そして、そのせいで己がお菓子の山を前に途方に暮れることになるなど、この時の雛には知るよしもなかったのだった。

稗田阿求は新しいモノ、未知のモノに対する探求心が強い。稗田阿礼の転生体であるためか、はたまた代々幻想郷縁起の編纂を生業としているからか、御阿礼の子とは得てして知的好奇心が強いのである。そんな彼女が現在人里で流行っている『外の世界ブーム』とでも言うべきこの波に、乗らないわけがなかった。そんなわけで、年始の忙しさも一段落して落ち着いてきた頃に、阿求が新しい行事を求めて偶然通りかかった雛を稗田家に連れ込んだのは当然の流れと言えた。

そこで、阿求はバレンタインとホワイトデーについての知識を身につけることになった。

具体的には以下の通りである。

『基本的に、バレンタインデーは女性が（恋愛的な意味で）好きな人に

親愛の表現としてチョコレートをあげる日よ』

『ふむふむ、(恋愛感情問わず)好きな人にチョコレートですね。ホワイトデーは?』

『バレンタインとは対照的に、男性が(バレンタインの)お礼にお菓子をあげる日ね。この二つなら幻想郷でやっても問題ないんじゃないかな』

『なるほど。(女性が送るのは対照的に)男性が(日頃の)お礼にお菓子を贈る日、ですか。』

知識を持っている側の雛がこのすれ違いに気がつかなかったのは幸か不幸か。いずれにせよ、僅かなすれ違いにより少しズレて阿求に伝わったこれらの知識は、稗田家によって人里全体に拡散されることとなる。

結果的に、バレンタインでは人里の女性が『人として』好きな雛にチョコレートをみんなして渡す騒動となり、ホワイトデーでは『日頃の』お礼として人里の男性がこぞって雛にお菓子を渡す騒動となったのだった。

「それで?この大量のお菓子をどうにかする為だけに私は呼ばれたと?」

「あ、あは、あははは……」

「笑って誤魔化してもダメよ」

「……………ごめんなさい」

結局、みんなの慧音先生からの号令で広場の片隅にまとめて置かれた山のような……………というより、最早山を形成していると言っても過言ではないお菓子たちを前に、私が頼ったのは友人でもある幻想郷のトップ『八雲紫』だった。

「にしても、どうしようかしらね？コレ」

文字通りお菓子^{かし}の山を前に呆然と立ち尽くす『人里^わの守り神^し』と『幻想郷^ゆの賢者^り』。端から見たらどんな状況に見えるのか。現実逃避をしていたら紫が問いかけてきた。

「バレンタインの時はどうしたのよ？」

「あの時は咲夜と美鈴に紅魔館まで運んでもらって消費した」

——全部チョコ菓子だったからその気になれば再加工は難しくなかったしね。作ってくれた人に対して悪いとは思うけど、ダメにするよりは良いだろうと苦肉の策の結果だった。

「……………うん。冥界に運んで幽々子に食べてもらいましょうか」

紫の結論は食欲旺盛な親友に押し付けることだった。まあ、妖夢の買い出しの苦労も多少は軽減されるはずなので異論はないのだが……………

「……………結局紫も他人頼みじゃない」ボソ

「……………雛？なにか言ったかしら」

「」

——いいえ、なにも言っていないです本当ですだからそんな怖…………眩しい笑顔を見せないでくださいさつきから冷や汗が止まらないですから!!!

「さて。雛、行くわよ」

怖い笑顔を引っ込めた紫は茶番は終わりと言わんばかりにスキマを開けてお菓子を放り込み、自らもスキマの中に入っていく。私は先ほどの冷や汗を拭いっつ、紫に続いてスキマの中に躊躇なく飛び込んだ。紫に手を引かれて白玉楼を目指しっつ、こんな友人関係も悪くないと思う私だった。

「雛さん、紫様!!本当に、本当にありがとうございます!!!」

白玉楼についてお菓子を一端妖夢に預けると、妖夢は泣きながらお札を言ってきた。

——うん。妖夢には強く生きてほしい。

仲間ができたメイドさんは機嫌がいい

夏の暑さが過ぎ去り、木々が徐々に色づき始めた今日この頃。突然ではあるが、私こと鍵山雛は、現在猛烈に追い詰められている。

「……………」

私の目の前には、紅魔館の門番である紅美鈴が立っている。いつになく真剣な表情をした美鈴は私に向けて、ゆっくりと手を伸ばしてくる。

「……………ッ！」

「……………ッ！」

両者の間に緊張が走り、束の間の硬直――

――そして……………

私の手からスペードの9が引かれ、私の負けが確定した。

「……………ッ!!勝ったああああ!!!!」

「ま、負け……………た……………」

美鈴は手元に揃ったスペードとハートの9を見せびらかしながら叫び、私は手元に残ったジョーカーを手に崩れおちた。

ここまでいえば何をしていたか分かるだろうが、私達がしていたのはトランプのババ抜きである。メンバーは此処、紅魔館に住んでいる全員。すなわち、主と^{レミリアとフラン}その妹、^{咲夜に美鈴}メイドに門番、そして^{パチュリィ、小悪魔}図書館組+私で

ある。

「全く、ビリ争いだっただのに大げさね」

「最下位は失うものがあるのだから当然の反応だと思うけど？それよりも、開始前に自信満々だったわりに、リアクションしにくいど真ん中の順位をとった人は誰だったかしら。ねえ、レミイ？」

「う、うっさいわよ！パチエ!!だいたい、あなただっけ私と大差ないじゃない!」

「でも、レミイよりは上よ？私」

「ぐツ!う、うー!!」

「あーあ。あとちよつとで一番だったのになあ……」

「ふふ。残念でしたね、妹様」

「勝てたらおねーちゃんと1日中遊べたのに」

周りではパチュリーがレミリアを弄り、ニコニコ笑っている小悪魔の横でフランちゃんが微笑ましい願いを口に行っている。

何を隠そうこのババ抜き、悪魔の館らしく優勝者が最下位の人に命令できる権利が賭けられていたのである。最下位は私。そして、栄えある優勝者は――

「それで、命令は何にするんですか？咲夜さん」

――そう。たった今美鈴が聞いた通り咲夜である。

「あなたが対象じゃなくなったからって随分楽しそうね……。でも、そうね。じゃあ……」

そうして私に与えられた命令は――

「……………お味はいかがでしょうか、お嬢様」

「うん、悪くないわね。ねえ雛?今日1日だけじゃなくて、いつそ住み込みで働かない?」

「……………慎んで遠慮させていただきます」

30分後、咲夜と同じメイド服を着せられてレミリアに仕える雛の姿があった。命令の内容は大まかに言えば咲夜の手伝いである。メイド服を着用し、掃除、炊事、洗濯などを行うことであった。ちなみに当初はフランに仕える予定だったのだが……

『わたしもお手伝いする!』

何に感化されたのか、フランはメイド側を選んだのだった。

『これでおねーちゃんとお揃いだねッ』

『(お揃いなのを喜ぶメイド服フランちゃん。……かわいい)』

とにかく現在紅魔館では、メイドが二人増えた状態なのだった。

そんな紅魔館の中では――

「パチュリー様、紅茶が入りました」

「ありがとう咲夜。とりあえずそこに置いておいてもらえる?」

――いつも通りの光景が広がっていたり、

「美鈴? お茶持って来たよ!」

「え?! ちよ、ちよつと待ってください雛さん!! ドジっ子のあなたがトレーに載せて運んできたら絶対ころびますからあ!!!」

「あッ」コケッ

「くくッ!! あつつううう!!!」

――門番がドジっ子の被害に遭っていたり、

「お姉さまはメイド服着ないの?」

「逆になんで私が着ないといけないのよ!」

「……………そっか。……………せっかくお姉さまともお揃いになれると思っただのに……………」

「くくくくッ!! 分かったわよ! 着ればいいんでしょ!! 着れば!!!」

「わーい! ありがとうお姉さま!!!」

——メイドさんがさらに増えたりもした。

少し時間が経ってお昼過ぎ。普段の服装に戻った吸血鬼姉妹に、雛は変わらず仕えていた。現在はちようどフランへの絵本の読み聞かせが終わったところである。雛とフランはソファに横並びで座り、妹に散々振り回されたレミリアは眠りこそしないものの反対側のソファで気だるげに横になっている。

読み終えた数冊の絵本を雛が揃えていると、フランが遠慮がちに話しかけてきた。

「おねーちゃん、お願いがあるんだけど……いい？」

「フランちゃん、どうしたの？」

「えっとね、おねーちゃんが作った料理を食べてみたいな……つて」

それは日頃、宴会などを除けばほとんど咲夜の料理しか食べることのない少女の、小さく可愛らしいお願いだった。

「（まあ、他でもないフランちゃんのお願いだし）……うん、いいよ。でも咲夜には一応確認して「では、今晚の夕食は雛に作ってもらいましょうか」咲夜!?!」

「足りない食材もあることだし、人里まで買い出しに行くわよ、雛」

「え?・ちよ、咲夜!?!待って、引っ張らないで!?!」

相も変わらず唐突に現れ、思いついたが吉日と言わんばかりに雛を連れて人里へ行く準備をし始める咲夜。この時、普段の態度からは考えられないほどにハシヤイでいたのだと、咲夜は後に気づくこととなる。いつも冷静な従者が珍しいと呆気にとられていたレミリアが『まあ、こんな日もあるか』と我に返った時には二人は既に人里へ向けて飛び立っていた。

「ねえ……お姉さま」

「なにかしら?・フラン」

姉と同じく置いてきぼりをくらったフランは、咲夜と雛が見える窓

の外に視線を向けたままレミリアに問いかける。

「おねーちゃん……………メイド服のまま行っちゃったけど、よかつたのかな?」

「……………え?」

その日、人里に降り立つ二人のメイドさんの姿が目撃された。ところで、日頃から雛を敬愛してやまない人里の住人がどういいう状況に陥ったかといえば――

「わあ!わあ!!雛様かわいいー!!!」

「おい!誰かあの新聞記者呼んでこい!!雛様の珍しいメイド服姿だぞ!!!」

「しかも咲夜さんとのツーショットだ!この場に居合わせた俺グツジョフGJ!!」

「誰かあ!河童を呼んできてくれねーか!?この前買った『かめら』とやらの使い方が分からねえ!!」

「お二方!お願いですから一枚撮らせてください!!」

「メイド服雛様かわいいヤッター!」

「メイド服の雛ちゃんにお世話されたい!」

「メイドな雛様に膝枕されたい!」

「添い寝したい!」

「欲をいえばその先のことも」「言わせねーよ!」「」

「おいおいお前ら、そんなありきたりなことしか出て来ねえのか?」

「親方?」

「俺はな……………むしろメイド服の雛ちゃんをお世話したい!!」
「「ツ!!それだ!!」」

——カオスである。

一部どころか過半数の男性陣（と、一部の女性陣）の脳内が桃色空間になっていることはさておいて、老若男女問わず大騒ぎである。里人たちを興奮させるなにかしらがあと一手でもあれば宴会がひらかれていることだろう。そんな里人たちに囲まれた雛と咲夜を、偶然見つけて呼びかけた人影が一つ。

たった今、この瞬間が、彼女にとっての分岐点となった。

「……………雛に咲夜?……………なにやってるの?」

「あ、アリス。もしかして人形劇の帰り?」

「私はその通りだけど……………雛はなんでメイド服着てるのよ」

二人に話しかけてきたのはアリスだった。雛はメイド服を着せられた経緯を簡単に説明し、現在の状況についても分かる範囲で答えようとした。

「さっき、此処に入った瞬間から、なんでかいつもより多くの人に囲まれたんだよね」

「そりやあなたが人里^コでそんな格好してれば囲まれるでしょうね」

呆れ顔を隠そうともせずアリスは雛にツツコミをいれた。だからだろうか。背後で怪しい笑みを浮かべた咲夜に、アリスは気づくことができなかった。……………最も、咲夜の能力からして気づくことができても結果は変わらなかつただろうが。

「一人だけ外野を決め込もうなんてズルいわ。そうは思わないかしら。……………ねえ、アリス?」

「……………え?」

咲夜の問いかけの意味をアリスが察する前に、既に咲夜は行動を終えていた。

すなわち——

「え、え?…ええええええええええええええええ?!?!?」

——一瞬のうちに、アリスもメイド服となっていた。

「おおおおお!! 咲夜さんナイス!!!」

「さすがは瀟洒なメイドさんだ! 仕事が早い!!」

「キレイな美人メイドさんの揃い踏みだ!!!」

「お三方!! できれば俺と付き合っ」「だから言わせねーよ?」

「ひ、雛ちゃんどころか、アリスちゃんのメイド服まで見られるとは

………我が生涯に一片の悔いなし!!!!!!」ガク

「二」お、親方あああああああ!?!」

人形師として人気があるアリスまでもがメイド服姿となったことで、里人たちの興奮度がさらに上がり、雛とアリスが人里から抜け出すのに手間取ったのは言うまでもない。なお、咲夜は買い物もちゃっかりと終わらせた上で時間を止めて人里から抜け出しており、一人涼しい表情で帰路についていた。

——（私人里に来る必要あった?）

——（私なんかなんの前触れもなく巻き込まれたわよ?）

その後、紅魔館でアリスを含めた全員に振る舞われた雛の料理は、そのドジっ子属性からは想像できないくらいには上手く出来ており好評だった。また、この日。人里では至るところで宴会がひらかれたという。

後日、3人のメイドさんが写った新聞が出回ることとなった。なお、この新聞が人里で飛ぶように売れ、歓喜で発狂しそうになった鴉天狗がいたことは完全に余談である。

本編

人里の守り神……???

——突然ではあるが、私——鍵山雛は転生者である。………いや、転生者というより前世の記憶持ちというべきか。なにせ『前』の記憶といっても病室の風景と現在自身が存在している世界である東方関係の知識ぐらいいしか持っていないのだから。いつ、どのような経緯を経て『今』のようになったのかは思い出せない。自分が東方の『鍵山雛』だと自覚したのも遙か昔のような気もするし、つい最近のような気もする。まあ細かいことはこの際どうでもいいのだ。要は私はそのような存在だということだ。

——で、だ。当然このような存在になった『私』は原作キャラ達との交流を望んだ。そして、こうして簡単に表現できるほど簡単でないことは十分に理解しているつもりだ。

他でもない私自身が、鍵山雛であるが故に。

『厄をため込む程度の能力』

私自身が原作の鍵山雛であるなら、その能力もまた、原作通りに私が所有しているのだから。他人との交流がしたい私にとって、これほど邪魔な能力もない。なにせ能力は無意識的に発動し、自身でどう制御しようとも何処からともなく厄が集まってくるのだから。厄が集まってくる限り、私の意志に関係なく周りは不幸になってしまう。この能力の凄まじさたるや、原作の幻想郷縁起の鍵山雛の項目に、人間友好度が『中』にもかかわらず、危険度『極高』と書かれるほどである。

——いやこれ本当にどうしよう？修行でもしたら能力制御できるようになるかな？でもそもそもどうやって修行すればいいかもわからないし………。

——諦めて遠くから見守るか？でもやっぱり交流持ちたいし……。
——原作キャラなら大丈夫だと信じて会いに行くか？でも私のせいで不幸になる娘こがいても困るし……。

一時は交流を諦めて遠くから見守るだけにしようかとも思ったりしたのだが、私はどうしても交流したいという欲求を抑えることができなかった。徐々に徐々に、遠くから見守るだけが、ふらつと姿を現すようになり。次いで一言、二言挨拶するようになり……。そこからもう、エスカレートしていくだけだった。次第に言葉を返してくれる人間や妖怪が現れ、恐る恐る会話をし、他人と会話をするだけで幸福感を感じていた。それでもいつかは拒絶されるのだろうかという覚悟を決め、今あるだけの幸福で十分だと自分に言い聞かせていた。

そして現在——

人里にて——

「あら？雛さんじゃないですか。うちの新作お菓子、味見してかない？」

お菓子屋の前を通ればその看板娘である店員さんに声をかけられる。

「「遊んでー雛様〜！」」

寺子屋の近くを通れば子ども達に囲まれる。

——いや、慧音サン？そんな微笑ましいものを見るような顔しないで子ども達を止めてください。

「あつー雛さん!!もしよろしければ、俺と付き合っ「バツカ野郎!!なに抜け駆けしようとしていやがる!!」ウルセエ！度胸のないヤツは引っ込んでろ!!」「さあ、雛さん？あんなバカ共はほつといて、どうです？

今から私とお茶でも「させるかー!!」おいやめろ飛びかかってくんな邪魔すんな!!」

「お前らなに言ってるやがる！神聖な雛様に俺たちが触れていいわけないだろうが!!」

「「そーだそーだ!!」」

道を通れば近くにいた若い男達がバカ騒ぎを始める。

——……………。

「あの、雛様。昨日からうちの子どもが寝込んでるんでちよつと診てはくれねえか？」

途方にくれて困っている人も声をかけてくる。

——あの、会うのはいいんですけど、私医者でもなんでもないですよ？

「なあに大丈夫！雛様が会ってくれるだけでだいぶ良くなりますから！」

——そ、そうですか。

「さあ、雛さん！今日こそ貴女的能力について教えて貰いますからね!!」

気づけば阿礼乙女に捕まっている。

——いや、阿求ちゃん。前に説明した通り私の能力は『厄をため込む程度の能力』だけだから。

「誤魔化そうとしたってダメですよ！『厄をため込む』だけでは説明できないことをやってたの知ってるんですからね！」

——イヤ、だから……………

「今日は絶対逃がさないんですからね！」

——……………。

「お！雛ちゃんじゃないか。今日はうまい梨が入ってるからさ！持ってってくれや」

気疲れして帰ろうと八百屋の前を通れば、店主にお供え物とかいっ

無料で食べ物押し付けられる。……明らかに一人にタダで与える量ではない……。

——いや、こんなにもタダでもらうのはさすがに……。

「いーのいーの！ なんだって雛ちゃんは『人里の守り神』様だからな！！」

——……………。

——ちよつと待つて!?!なんで私は普通に交流できてるの!?!なんでみんな不幸になってないの!?!守り神つてなに!?!

まあ確かにある時期を境に私の周りの厄がなぜか見えなくなつたけども!! そもそも私これでも厄神だよ? どちらかといえは神様よりも妖怪寄りだよ? 信仰なくても大丈夫だし! それがなんで人里の守り神になつてるの?!?!?!

……………!!?!……………はあ、まさかこの言葉をネタではなく、本当に使うことになるとは思わなかつた。

いや、本当に——

「……………どうしてこうなつた?!?!」

紅の中の日常？

博麗の巫女、博麗霊夢は自由人である。何者にも縛られず、自分の興味のないものには全く意に介さない。そんな性格である。そんな性格であるのでちよつとした事件が起きてても自分に害が及ばないのであれば、すぐ解決に動くことはあまりない。

——言い換えればただのめんどくさがりである。

なので——

「そろそろ、行きましようか……」

——紅の霧が発生し始めてから霊夢が動くまでで、2日がたっていた。

この2日間に霊夢の周りで起こったことを挙げるならば、せいぜい親友である白黒魔法使いの少女が異変を解決すると宣言して飛び立っていったことぐらいだ。

己の直感を信じ、博麗の巫女は霧の濃い方角へ飛んでいく。

普通の魔法使い——霧雨魔理沙は戸惑っていた。

魔法の森上空を飛んでいた魔理沙は急激に広がっていく紅の霧を目撃し、しばらく様子を見た後、これを異変と判断。博麗の巫女である霊夢に異変だと伝えた後にすぐさま異変の調査を開始した。

そして、すぐに彼女は気づくこととなる。

『人里だけ霧に覆われていない』

正確には人里の中心からおよそ3キロほどが覆われていないだけで、端のほうは普通に霧が存在するのだが、人里が何らかの方法でこの霧を防いでいることは明確だった。

魔理沙は魔法使いになるために人里の家を飛び出してきた身である。実家のこともあるのであまり人里には近づきたくはなかったが、異変解決の手掛かりになるのなら、とやむなく人里に入ってみたのだが……………

人里ではお祭りが始まっていた。

「……………は？」

呆然としてしばらくその場で固まっていたのは仕方ないと思う。しかし、そうとしか表現できなかったのだ。人里では異変の真つ最中であるのに、霧を何らかの手段で防いでいるとはいえ、まるで縁日の様相を呈している。大通りの道端には屋台がところ狭しと並べられ、広場ではなにやら演目が始まろうとしている。霧が広まる前まではなんの準備もされていなかったことから急遽始まった祭りであるはずなのに、人々の半数以上は浴衣を着ているという徹底ぶり。

「……………いやいや、待て待て、なにをどうしたらこんなことになるんだ？」

まだ霧が出始めてから確実に半日は経ってない。

なのにこの状況。

(まさかお祭り騒ぎで霧が吹き飛んだとか?)

そんな馬鹿な考えが一瞬頭に浮かんだが次の瞬間には否定した。

——多分河童に霧を無効化する装置でも貰ってそれがうまく機能しているからこそのお祭り騒ぎなんだ。妖怪の干渉を妨げることができたんだから。きっとそうだ、そうに違いない。

(絶対にその装置を見つけてやるんだぜ……………)

その考えが、異変なのにお祭り騒ぎな人里からの現実逃避だと気づくのに、魔理沙は1日要することとなる。

霊夢は現在、妖怪の山と人里の丁度中間あたりを飛んでいる。此処までで既に、道中邪魔になった宵闇の妖怪を撃墜している。

途中、人里方面だけやけに明るいのが気になったが……………

「ま、どうせ雛がなにかしてるんでしょ」

——あの厄神は周囲に危害を加えるどころか様々な不幸から守ってくれると人里を中心に評判だ。人里に雛がいるなら人里の心配はしなくていい。

自分がすぐに動かなかったことを棚にあげ、霊夢は異変の主犯を探すことに集中する。

「……………向こう……………かしら？」

よく見ると、霧の湖の向こうに真っ赤な色の洋館が見える。いかにも目に悪そうな見た目をした洋館に向かう道すがら、霊夢の頭に浮かんできたのは先ほどの厄神のことだった。

鍵山雛。

種族は厄神様。

能力は『厄をため込む程度の能力』。

二つ名は『秘神流し雛』や『悲劇の流し雛軍団の長』など。また此処数年では『人里の守り神』などと呼ばれるようにもなった。

種族的には神と呼ばれるものの、妖怪の性質も持つ為に信仰がなくとも問題ないとは本人の談である。

……………が、此処のところ雛自身が『人里の守り神』と呼ばれ始めたからか、人里での雛の人気ゆえか、明らかに雛を信仰する人が増え始めているのである。本人にその気がないのに信仰心まで持つていかれるのは正直少しではなく困っているが、かといって霊夢に打てる手はない。雛を排除しようとすれば、もれなく博麗側の信仰心のガタ落ちが付いてくるのだから。

さらにいえば、雛は『人里の守り神』と呼ばれていようとも、人里に住んでいるわけではない。むしろ妖怪の山周辺を根城にしているのである。そして彼女の性格を考えれば、妖怪の山に限らず様々な場所に友人知人がいてもおかしくないものである。そんな中で彼女が害されたと知れわたればどうなるか、想像したくもない。

そんなわけで、現状で彼女を害そうとするヤツは（知能が発達していないヤツらを除いて）よほどのバカか、状況の読めない無能だけだ。

——それに、霊夢自身、雛と敵対することは望んでいない。

信仰以外で困っていることがないのもあるし、会う度にニコニコ微笑みながら声をかけてくる彼女に対して少なからず友情を感じていることもある。

それに何より——

(……………よく食べ物持ってきてくれるし)

……………食べ物で簡単に絆されてしまう、なんともチヨロい巫女さんなのだった。

「……………此処ね」

「……………ああ、霊夢か」

紅の洋館——紅魔館の前に、奇しくも霊夢と魔理沙は再会を果たした。片方は戦闘があつたにも関わらず出発前と変わらず、もう片方は戦闘がなかったにも関わらず目からハイライトが消えかかっている。

「魔理沙?……………あんたになにがあつたの?」

「……………ははっ……………聞くな、霊夢。強いて言うならあの人里が少しおかしいってことを実感しただけだ……………」

「はあ?」

薄ら笑いでどこか遠くを見るように明後日の方角を向いた魔法使いの胸中を知ることが、残念ながら霊夢にはできなかつた。

「……………結局人里ではなにが起きてたんだよ」ボソツ

「……なにか言った？」

「イヤ、なんでもない……………」

洋館に堂々と真正面から入った二人は門番、魔女、メイドを撃破し、
霊夢は無傷で、魔理沙は満身創痍で、館の主がいるであろう部屋の前に立っていた。

「」

既に魔理沙は口から魂が抜けかけている。なお、原因の8割以上は人里が占めている。図書館で若干息を吹きかえたものの、『メイド』が時間を操っている様を見て人里を思い出してしまったらしい。戦闘後、死んだ目をするようになった魔理沙を見て、メイド——十六夜咲夜は敗者であるにも関わらず魔理沙の心のケアに奮闘することになった。

「全く、しつかりしなさい。いくわよ」

魔理沙のことはあまり心配せず、そう言っただけで霊夢は部屋の扉を開けた。

扉を開けた先にあつたのは広大な空間。王との謁見に使われるような内装。部屋の真ん中には王の威厳を放つかのようになっている椅子。しかし、その椅子の上には主はおらず、部屋の主は窓際に立って外を見ていた。

小声ではあるが、主らしき少女の独り言が聞こえてくる。

「……………なんで？…なんでどれだけ霧を濃くしても人里は覆われないの!?!これまで私がどれだけの妖力を使ったと思ってるの!?!このままじゃ巫女が来ても妖力不足で話にならな……………うーうー!!!」

此処の主であろう少女は、なにやら頭を抱えながら唸っていた。

「……………」

霊夢と魔理沙の間になんともいえない空気が漂った

……………

……………と、感じたのは霊夢だけらしい。

「そうだよな……………人里ワケわかんねえよな……………」

「いや、魔理沙？あんたなに言ってる——」

「そうよね！人間が妖怪の術を無効化するとか普通は無理なもの！」

件の少女が振り返りすぐさま魔理沙に同意を返した。

「ところで貴方たちはいつ入ってきたの？」

「……………たった今よ」

「ふーん。それで？何しにきたの？」

「……………異変の解決をしにきたのよ」

異変の主犯とは思えないチグハグな会話に霊夢が疲れを感じてきたのは仕方のないことだった。

「博麗の巫女……………か、まあいいわ。名乗りましょう」

そうして、やっと、館の主が名を名乗る。

「私の名はレミリア・スカーレット。誇り高い吸血鬼」

本来であれば吸血鬼についてや異変を起こした理由など聞きたいことは山ほど出てくるのだろうが、霊夢がまず疑問に思ったことは……………

「……………誇り……………高き？」

「なんで名乗って一番最初のセリフがそれなのよ!？」

今までのやり取りから疑問に感じた霊夢に罪はないが、レミリアの反論はもつともだった。

「さ、さて、相手は二人だしこちらも同数で迎え撃ちましょうか。咲夜―! さーくーやー!」

「はい、お嬢様。なんのご用でしょう?」

気を取り直して勝負を始めようとレミリアが呼べば、すぐ横に咲夜が音もなく一瞬で現れる。

「いくわよ咲夜! あの二人をボッコボコにするんだから!」

「……2対2、ね。くるわよ魔理沙……」

「………魔理沙?」

「チーン」

反応がない相棒に霊夢が振り返ると、突如として出現した咲夜を見た魔理沙が再び口から魂を放出していた。

「………申し訳ありませんがお嬢様、私はあの白黒の看病をしていますので、思う存分巫女とやりあってくださいませ」
「さくやく!」

咲夜が間を置かず不参加を表明する。

「なによ咲夜! 私と一緒に戦ってくれないの?」

「ですがお嬢様? 2対1は少々卑怯かと」

「………それもそうね」

咲夜に簡単に丸め込まれたレミリアに対して、霊夢は今までのレミリアの言動もあり大分呆れた表情を隠せなくなってきた。

「………ゴホン。いくわよ博麗の巫女。こんなに月も紅いから、………楽しい夜になりそうね」

「……………決めゼリフを言うならもつとマシな空気を作ってから言ったら？」

「それは言わない約束でしょー!!!」

なんとも言えないグダグダした空気の中で、ようやくラスボスとの戦いが始まった。

「…………う、うう。に、にんげんがわからない。にんげんこわい……………」

「魔法使いをここまで追い詰める人里も相当ですわね」

ちなみに霊夢とレミリアの勝負は特になにかあったわけでもなく普通に霊夢が勝利した。

——蛇足ではあるが、後の異変解決の宴会において、レミリアと魔理沙は意気投合したのかよく話していた。

あのプライドが高く気難しい面のある親友が珍しい、と紅魔館の魔女であるパチュリー・ノーレッジが冗談混じりに何を話しているのか問いかけると、二人は揃ってこう答えた。

「人里怖い」と。

ついでに「人里は妖怪の力を無力化できるようになったらいい」という噂が妖怪の間で囁かれるようになった。

紅の中の非日常

——よし、とりあえず状況を整理しよう。

まず『私』が鍵山雛だと自覚した。

で、他人との交流を始めた。

そんで人里にも姿をみせるようになって。

気がついたら守り神呼び……と。

うん、なんで???

人里に行くようになってからなにが起きた？

あ、そういえば1回厄神だからって拒絶されたことがあつたっけ。そうだった。で、そこから数年は人から距離を置いたんだった。そういえばこの辺りで私の周りの厄がいなくなったような気もする。そんでまた我慢できなくなって他人との交流を再開したんだったか。

でもまあ、私厄神だし拒絶されたのは特に変なことでもないんだよね。今の状況がおかしいってだけで。周りの厄が消えたのはちよつとよくわからないけど。時期が近かったのも偶然だろうし、守り神呼びとは関係ないだろうしなー。

他には人里近くをうろつく怪しい妖怪を撃退したこともあつたっけ。でも幻想郷に住んでれば妖怪の撃退なんて事例は日常茶飯事だろうし……。

ただこの他は……これといって変わったことなんかなかったし……。

ホント、なんでだろ???

.....あとは厄が消えた辺りから妙にドジをやら
かすようになった気がするんだけど.....まさか、ねえ。そんな
ドジっ子だから距離が縮まったとかそんなそんな
.....まさかだよね??

.....
.....
.....

ま、いつか!

考えてもわかんないし!

また拒絶されたらその時はその時だ。元サヤに戻るだけだし、問題
ない問題ない!

さて、今日は何処に行こうか。昨日は人里に行ったから、人里以外
で.....魔法の森にでも行ってみようか.....。

うん、そうしよう。そろそろ香霖堂で掘り出し物を漁るのも悪くな
い。そうと決まれば行動だ。主人公の二人とアリスには会えるだろ
うか?会えればいいな!もしくは別の出会いでも可!!

では、いつてきまーす。

魔法の森に行ってから数日たった。香霖堂で掘り出し物を探した
帰りにアリスと遭遇し、そのままアリスの家で服の装飾談義に熱が入

り、気がつけば夜が明けていたことは少し反省しようと思う。楽しかったから後悔はしていない!

ま、まあ。何はともあれ、あれから数日――

幻想郷の景色は一変していた。

世界を覆い尽くすほどの紅い霧。

原作通りに紅霧異変が始まって……………いる……………の、だが……………。

(なんで私の周りにだけは霧が出ないの?????)

そう。なぜか私の周辺だけは霧が存在しない。具体的には私を中心に周囲3kmほどはいつも通りである。いや、ホント、なんで???

そして、理屈は分からずとも私の周囲は安全だと思われたらしく。現在人里の中心で軽く軟禁状態である。

……………というか、私が人里に1日中とどまっているからか、里はどこもかしこもお祭り騒ぎである。

――具体的には

「酒だ!!酒を持ってこい!!!今日は宴会じゃー!!!」

「なに一人で突っ走ってやがる……………:雛様へ献上するための最高の酒を用意するほうが先だろうが!!」

「おっと、そうだった!雛さんに感謝せずして飲めないよな!!」

「当然だ。というわけで酒屋の親父!一番良いのを頼む!」

――とか

「野郎ども!!今日は祭りだー!!!」

「「「「おおおお!!!」」」」

「速やかに屋台をだせ!! 情けない姿を雛様に見せるんじゃないぞ!!」

「「「「当然じゃあああああ!!!」」」」

——とか

「さあ、いらっしやいいらっしやい!! 今日突発の雛様感謝デー!! 店内全品2割引の提供だよー!!!」

「ふ、甘いな八百屋!! さあさあ、皆さんよつといでー!! こっちには今日限定の雛ちゃんクッキーがあるよー!!!」

「ハッーその程度で『甘い』などと、片腹痛いぞ甘味屋!! こっちは昨日一晩で作り上げた雛様人形だ!!!」

「ククク……お前らは所詮その程度。こっちが出すのは………これだ!!! 俺の今までの努力を全てつぎ込んだ………雛様の写真集だ!!!」

「「「なにっ?」」」

「どうだ! 普段の柔らかかに微笑んでる雛様からキリツとした凜々しい雛様。果ては転んであられもない姿を晒している雛様まで「「……あ」」………え? お前らどうし——あ、け、慧音先生? イヤイヤこれはちゃんと雛様に許可をとって………と、盗撮? やだなーそんなことしてないですよ………か、確認をとってくる? い、いや、そこまでする必要ないんじゃないかと………あの、なにを納得してるんです? ……どのみち説教することになりはなかつた? ……い、や、えと、あの………ごめんなさい!!! 雛様にも謝ってくるんで許してください!!! あ、ちよ、まってまって!! 頭突きだけは——」

「……………うん、悪は滅びた」

「……………そうだな」

「……………ちゃんと仕事するか」

「……………そうするか」

——……………とか。

——うん、途中で変な場面があった気がするけど私はなにも見えない。見ていないっただら見ていない。

というか今異変の真っ最中なんだけど。普通に考えて宴会とか開いてる場合じゃないと思うんだけど……………。

まあ、必要なものはだいたい里人が用意してくれるし、そもそも不満もあまりないのだが。ただ私としては早く紅魔館組に会いに行ってみたいところではあるので、この異変が早く解決されるのを願うばかりである。

——無理かなー。霊夢ちゃん面倒がつてギリギリまで動かないだろうしなー。魔理沙ちゃんが動くにしても確実に解決できるかわからないしなー。

——え？私自ら解決しに行かないのかって？だって私いま軟禁状態だし……………私……………弾幕ごっこ弱いし……………(泣)

気がついたら異変は終わってた。2、3日は人里にいた気がする。そして、私が人里にいる間はずっとお祭りだった……………。

……………ホントに人里大丈夫なのかな???

紅の後の邂逅

紅霧異変から一週間。異変解決の宴会も終わり、紅魔館という勢力が加わったものの、幻想郷はいつもの日常に戻りつつあった。

そんな中で。

紅魔館のメイド長——十六夜咲夜は朝から人里を訪れていた。理由は勿論紅霧異変で被害の出なかった人里の調査——もとい、人里の被害を抑えたと思われる鍵山雛の調査である。宴会の際に魔理沙は情報を持っていなかったのだが、霊夢は『厄神、鍵山雛』が関わっているのではないかと証言。主であるレミリアに伝えたところ、早速調査に赴くことになった次第である。

そうして、手始めに人里で聞き込みを試みたのだ。『異変の時に霧に覆われなかったのか？』『誰かに守ってもらっていたのか？』それとなく聞いてまわった。

——結果、

事情を知っている人々は誰もが口を揃えて言ったのだ。

『雛様に守ってもらったのだ』と。

そして調査の対象を鍵山雛に変えた途端、ほとんどの人から情報を得ることができるようになった。聞く人聞く人だれもかれもが鍵山雛の話題になった瞬間から興奮気味に語ってくれた。

曰く——

——人里の守り神

——俺たちの女神

——みんなの天使

——緑の髪に赤のリボン

——遊んでくれるおねーちゃん

——彼女に会えた人間は幸福になる

——むしろどうやっても会えない人間は不幸の塊である

——ドジっ子なところがかわいい

——などなど……。

「……………ひよつとして人選を間違えたかしら」

完璧で瀟洒なメイドであると自他共に認める十六夜咲夜が唸ってしまいうぐらいには、人々の話に具体的に語られたものは少なかった。あるいは、これら証言の一つ一つ全てが真理の可能性もあるが。

——そもそも守り神と言う割には情報の扱いがガバガバじゃなからうか。口止めされているのかと思えばそんな態度でもないし。

そんなことを考えながらも咲夜は『鍵山雛』の情報を午前中にはだいたい聞き終えていた。むしろ情報を聞き出す度に一々自慢話が入るので、これでも時間がかかっているといえる。

そうして咲夜は午後には鍵山雛の寝床があるという妖怪の山の麓を散策していた（寝床の正確な場所を知っている者はいなかった）。山の麓で人一人を見つけようとすればただでさえ時間がかかるというのに、それが妖怪の山ともなればどれだけ時間がかかることか。

まあ、それでも——

「やっと見つけました。貴女が『人里の守り神』鍵山雛様ですネ？」
「ん？」

咲夜は目的の人物を探し始めてから1日と経たず、雛を見つけ出したのだった。

件の少女は木陰に座っていたが、咲夜の声に応じて立って振り返り

.....

「ひあっ!？」

ボタン……………と足元の石に躓き盛大にコケた。

——なるほど、ドジっ子という話は本当らしい。

紅霧異変から一週間がたった。

——私にとっては人里から解放されてから一週間たったともいえるが。

紅魔館にはまだ訪れていない。異変のゴタゴタもあるだろうし、幻想郷に馴染むための期間も必要だろう。なのであと1、2週間たつてから訪ねてみるつもりだ。

それにしても今日は天気がいい。夏のこの時期にしてはそこまで暑くなく、適度にそよ風も吹いていて絶好の昼寝日和だ。思い付いたそばから木陰に入り、木に体を預けてウトウトし始めたその直後。後ろから声をかけられた。

「やっと見つけました。貴女が『人里の守り神』鍵山雛様ですね?」
「ん?」

そこには紅魔館のメイド長——十六夜咲夜その人が紛れもなく佇んでいた。もちろん原作キャラと会えたのは嬉しい。嬉しい………んだけど……………

「ひあっ!？」

——唐突に咲夜さんから声かけられてびっくりしてコケた。しにたい。

私は現在紅魔館の応接室でレミリアに歓迎を受けている。あの後
咲夜に連れられて紅魔館にお邪魔し、紅魔館の細かな内装を眺めてい
るうちにあれよあれよと準備が進められ、いつの間にかレミリアと一
緒にお茶会をした。傍らには咲夜と美鈴がついている。レミリア
と話し、咲夜が紅茶をいれ、話題で分からない箇所は美鈴が補足して
説明してくれる。すごく、楽しいです。

——ちなみに咲夜には紅魔館に来るまで敬語なしの呼び捨てで
いいと言われた。こっちも同じでいいと言ったらお嬢様のお客様で
すので断られた。なんとか説得しようとしたらもつと親しくなっ
たら同じにすると言われた。なんか負けた気分。

さて、紅魔館まで来たはいいものの、ぶっちゃけ私ってなんでここ
にいるんだろ？私の予定では紅魔館此処を訪れるのは少なくとも一週間
後だったはずだ。そのはずだったのだが、咲夜がいきなり現れて紅魔
館に来ることになり、レミリアと紅茶を飲みながら世間話をしてい
る。……………なんで？

んー…考えられるのは私に対して探りをいれてるとか？でも敵
対行動どころかこうして会話をするのも今日が始めてだし
……………

あ、そっか。人里は霧の影響をほとんど受けなかったからかな？そ
んで元凶である私を警戒してるとか？

……………ん？ヤベーよ。その気はなかったのに思いつきり敵対行
動してたじゃん！あれ？これヤバくない？下手な答え方したら私消
されるんじゃない？

……………うん。正直に話してしましましょう。(思考

放棄

案の定、話題の一つとしてなぜ霧を消すことができたのか聞かれたので、なんでか私の周りだけ霧が出なかったことを正直に伝えた。私の能力と一緒に。そしたら能力の無意識的な発動で周りから害になりそうなものが厄として消えたんじゃないかと言われた。

——確かに厄を集めるだから霧が厄に変質して集まってきたも不思議じゃないんだけど、その厄はいつたい何処に行ったんですかねー？

ついでになぜ人里を守っていたかを聞かれたが、私異変のときは人里で軟禁状態でさー、みたいなこと言ったらレミリアがギョツとしてこっちを凝視してた。

その後もゆったりとしたお茶会が続いたけど、レミリアは咲夜の様子を時々心配そうに見ていたりした。

——ひよつとして私が厄神だから？厄が移ってないかとかそういうこと？ご、ごめんね？でもたぶん大丈夫だよ？厄は依然としてどっかいったままだし。人里の人も特に不幸になったとかは聞かないし。それからパチュリーを紹介してくれるってことで皆で図書館に行くことになったんだけど——

「ヒナ……………うん！これからよろしく！おねーちゃん!!」

……………。神様、これは一体どういうことですか???

異変が終わったその後で

私達が起こした異変が終わってから、私はどうしても確認しておかなければならないことがあった。あの異変の際、なぜ人里だけは被害を逃れることができたのか？ということだ。霧自体は人の心身に直接影響がでるものではなかったとはいえ、あれだけの異変ことを起こしておいて人里からの恐れの影響がゼロでしたとなるとさすがに見過ごせない。いかに人妖が共存している幻想郷とはいえ、恐れを得ることができなければ、それは消滅一步手前にいることと何ら変わりはないのだから。宴会で魔理沙に聞いたときは具体的な状況が分からず恐怖におののいていたのだが、咲夜が霊夢からしつかりと聞いてきてくれていた。

人里の守り神『鍵山雛』

どうやらこの厄神が、霧を防いだことに一枚噛んでいるらしい。私の霧を防いだことからそんじよそこの妖怪なわけないと想定していた。だからこそ、いざとなれば時間を止めて逃げるのできる咲夜を偵察に行かせ、紅魔館に招き、お茶会には美鈴も同席させた。

応接室で彼女と相対したとき、まず私は驚愕した。

なぜなら彼女の妖力や神力、また、厄神なら普通はまもっているだろう厄の類をほとんど感じられなかったからだ。

ここから推測できる可能性は2つある。一つは私の想定が間違いで、鍵山雛はそこらの妖怪よりも実力が低い、あるいはそのレベルまで弱体化している可能性。もう一つは己の力を外部にほとんど放出させることがないぐらいに自分の力を操れる………幻想郷でもほんの一握りしかない強者の一人である可能性。

私の霧を防いだことを考えれば、どう見たって後者だった。笑顔の裏でなにを考えているか解らず不気味に感じられた。まるで、あの胡

散臭い隙間妖怪のようだった。しかし、お茶会が始まり会話を重ねることで、私はこの印象をすぐに撤回することとなる。

理由は……………

……………彼女が笑っていたからだ。

初めて会う私たちのお茶会の間、いつだって彼女は素直に感情を表に出して、いつだって楽しそうに笑っていた。「ニコニコと笑う」という表現がこれほど似合う表情を私は他に知らない。口元は微笑をつくり、瞳はキラキラと輝いている。今の状況を心の底から喜んでいくかのような、まるでほんの少し疑うだけでも途方もない罪悪感が襲ってくるかのような、そんな笑顔。あの隙間妖怪と比べること自体がおこがましいことだったのだと、私はすぐに理解させられた。周りを確認すれば、美鈴は楽しそうに笑っているし、咲夜も一見澄ました顔をしているが、よく見れば口角が少し上がっている。かく言う私も既にこのお茶会を楽しみつつある。何かあるたびに本当に嬉しそうに笑う雛を見ているとこっちまで穏やかな気持ちになってくる。

——って！いけないいけない。友好を築くのは結構だけど、最初の目的も果たしておかないと。

話の流れでなぜ霧が消せたのかを聞いてみたら、特に言い渡ることもなく話してくれた。霧が消せたのはどうやら能力の無意識的な発動らしい。それならば納得できるというものだ。能力の無意識的な発動とはいわば防衛本能だ。実際に害になるかは別として、害になりそうなものをシャットアウトしたのだろう。

ついでになぜ人里を守っていたのかも聞いたのだが……

「いやー、私異変のときは人里で半ば軟禁状態だったんだよね」

という答えがかえってきた。

困った困った。と笑いながら軽く話す雛を見て思わず和んでしま

いそうに――

――いや、待て。流されるな。

軟禁状態だった？

かなりの実力を持っているだろう雛が？仮に私の見立てが間違つてて雛に実力があまりないと仮定しても、そもそも人間と妖怪・神の間には基本的には絶対的な地力の差があるはずで……………

……………まってまって、本当に待ってほしい！

この子を軟禁できるって、

――どんな魔境よ!?人里は!?!?

当初は人間に友好的な妖怪や神が人里を守護しているのだと思っていた。実際、雛の性格を考えれば人間に友好的というのは間違つてはないだろう。しかし、霧を消せた経緯から導きだされた答えは、そんな生易しいものではなかった。

(なに!?人里はこの子の弱みでも握ってるの!?ていうか咲夜は!?朝から人里に行つてた咲夜は大丈夫だったの!?)

慌てて咲夜のほうを振り替えるも特におかしな反応はなし。

(もしかして人間だから?人間だから見逃されたとか!?)

もし咲夜ではなく美鈴を偵察に出していたらどうなっていたか、考えたくもなかった。

その後、咲夜の様子が気になった私は、雛とのお茶会でなにを話していたかも満足に覚えていない。かろうじて覚えているのは妹と魔法の親友がいると話したぐらいだろうか。結局、私のその状態はパチエを紹介するために図書館に着くまで続いたのだった。

暗い暗い、紅魔館の地下の底。図書館よりもさらに深い地下の一室で、宝石のような羽を持つ少女は閉じこもっていた。

家族じゃない存在が館にやって来ているのは感じ取っていた。みんなが楽しそうにしているのも、感じ取れた。

だからこそ、なおのこと。少女は閉じこもる選択をする。

他の誰かを傷つけないために。

新しい友人を作れそうな、他でもない、家族のために。

少女の中には狂気が宿っている。

——頭の中で、私じゃない『ワタシ』の声が響く。

——みんなタノシソウ。

——混ザツテ来ヨウヨ。

——壊シチャエ。壊シチャエ。

頭の中で響く声は、徐々に少女の思考を侵食し、徐々に徐々に少女の理性を奪っていく。

少女が部屋を飛び出すまであと……………1分。

少女が救われるまで、あと……………

「……………あなたが、助けてくれたの？」

「フラン何を言って……………雛？」

フランの視線の先には雛がいた。雛以外の全員が一斉に雛に視線を向ける。

「？」

見つめられた雛自身は疑問符を浮かべ、なにが起きているのか分かっていない。が、そうこうしているうちにフランは自身で結論を出したらしい。

「……………ふふふ、ま、いつか！私はフラン。フランドール・スカーレット！あなたは？」

「え？えつと、鍵山雛……………だけど」

状況がよく分かっていない雛はとりあえず名乗り返し…………

「ヒナ……………うん！これからよろしく！おねーちゃん!!」

——空気が、凍った。

「……………『おねーちゃん』?!?!」

雛、美鈴、小悪魔の3人が驚愕のあまり声をあげた。声にこそ出さないものの、咲夜とパチュリーも呆然としている。

「」

……………そして、実の姉は完全にフリーズしていた。

そんな周囲の状況など関係ないといわんばかりに、フランは雛に対してコミュニケーションを取り始める。

「ねーねーおねーちゃん、フランと遊んでくれないかな？」

「え、まあ、かまわないけど、なにをして遊ぶの？」

「うーんとねー弾幕ごっこー！」

「……………えと、私すつごく弱いよ？他にはなにかない？」

「他？じゃーねー……………あ、おねーちゃん絵本読んで！」

「絵本？いいよ。で、絵本はこの図書館のどこにあるの？」

「うーんとねー、こっちー！」

「……………ハッ！ちよつと待ちなさいフラン!!あなたのお姉ちゃんはこの私よ!!!」

周囲を置き去りにして会話を続け、そのまま駆け出していきそうな2人に対し、ここでようやく待ったが入る。が、ようやくフリーズから復帰した本物の姉は、ちよつとズレたことを指摘し始めた。空気が一気に弛緩したことで、周りも状況を理解し始める。同時に――

「……………レミイ？貴女はこんな時になにを言ってるの？」

――あんまりな会話の流れに、親友の魔女からは呆れるようなツツコミが入り……………

「……………??お姉さまはお姉さまだよ？」

……………妹からは純粹に返された。

結局、そのままフランは雛と疲れはてるまで遊び倒し、日も越えようかという時間になって雛を巻き込んでベッドにダイブした。遊び倒したフランは勿論のこと、紅魔館に招待されてからそのまま付き合わされた雛も、横になるなり即効で寝入ってしまった。正直、雛には悪いことをしたと思っっている。

ただ、それでも。今日会ったばかりだがかなりの好感が持っている友人に迷惑をかけるとしても。レミアアにとって、この結末は言葉では言い表せない程に嬉しいものだった。

「あの子のあんな笑顔は……………いっただいいつ以来なのかしらね」

もしかしたら初めてなのかもしれない。そう思えてくるほどに、今日のフランの笑顔は眩しかった。まるで狂気など初めからなかったかのように。

『おねーちゃんを見たとき、心の中のモヤモヤがスツとなくなっていくたの』

遊びの途中で少しだけ体の具合について聞いたとき、フランからは

こう返ってきた。やはりフランからみても、狂気が消えた要因は雛にあるらしい。

（雛がなにかした？でも雛自身はなにが起きているのか理解していないみたいだったし……………あ）

ふと、レミリアには思い当たることがあった。

——能力の無意識的な発動？フランの中の狂気を厄として吸い取った？

『厄をため込む程度の能力』。それが、厄神である雛の能力だと聞いている。ため込むというのだから言い方を変えれば周囲から吸い取るということであり、必然、雛の周囲からは（範囲がどれ程かは分からないが）厄が雛に引き寄せられることになる。そして、先日の異変で霧を消せた（吸い取った？）ことから、自分にとつて害になりそうなものを厄に変換することが可能だと思われる。それならフランの中の狂気が消えたことにも説明がつく。

尤も、アレコレ考えたところで推測でしかないし、しかも雛自身は無意識で行っているのだから本人に聞いても具体的な答えが返って来ないのだが。

ただ、それでもいいと、レミリアは思った。このまま雛に任せてみようと思った。普段なら今回のような不確定要素の多い事柄に任せることなどありはしないし、こと妹のことに關しては今まで慎重に慎重を重ねて行動してきた。だが、今回だけは、新しい友人がくれた奇跡にすがってみようと思えた。

東の空がうつつすらと明るくなり始めた頃。レミリアは自室のベッドで横になる。目蓋を閉じた暗闇に浮かぶのは、愛しい妹とできたばかりの友人が、揃って見せてくれた穏やかな寝顔。

（明日は、たぶんもつといい日になるわね…………）

二人の寝顔と同じような穏やかな表情を自覚することなく、レミリアは眠りに落ちていった。

3月3日の雛の受難

「……………んう？」

その日、雛はいつもとさほど変わらない時刻に目を覚ました。未だ半分は夢の世界にいる雛は、寝ぼけながらも着替えを済ませ、朝食を作るためにキッチンに移動した。

「……………あたまいたい」

キッチンには空になったお酒のビンが置いてある。雛が昨日、人里近くで店を出していたミスティアから貰ったものだ。月を見ながらの熱燗が美味しくて、止められずにビンを空にしてしまったことを思い出した。水を一杯飲むことで眠気と頭痛を抑えた雛は、今日は何をするか考えながら朝食を作り始めたのだった。

時刻はそろそろお昼を何にするか考え始める時間帯。私、鍵山雛は現在人里にきています。私があるとすぐに里人が集まってくる……………のは、いつものことなただけど……………

……………なんか歓迎にいつもより熱入ってない？

縁日のように屋台が出ていたり、みんなが晴れ着を着ていたりするわけではないが、どこか浮わついた空気を醸し出している。

加えて――

「「雛様！ 私たちががんばって作ったよ！」」

――子どもたちが。

「「雛ちゃんきつと驚くから！」」

——買い物途中の主婦たちが。

「おう、雛ちゃん！今年はちゃんと里の全員で流しといたからな！」

——里の入り口に立っている門番さんが。

里の誰もが『頑張って作った』『きっと驚く』『流しといた』と口にする。

流しといたってもしかして流し雛のこと？確かに私は原作の雛同様、流れてくるひな人形の回収をしているし、人里でも周知の事実だけれど。でも驚くっていったいどういうこと？

挙げ句、みんなが声を揃えて言うのだ。

「「「なんたって今日は雛様の日だからな！」」」

……………私の日？どゆこと？別に今日誕生日ってわけじゃ……………いや、ちよつとまで。そもそも『雛』の誕生日っていつだ？妖怪や神に明確に誕生日ってあるものなのか？

人々の言葉を疑問に思いつつ、お昼を食べてから川まで来てみると

——川がひな人形で埋め尽くされていた

「……………ええ？」

川のどこを見渡してもひな人形、ひな人形、ひな人形。

——え、ナニこの状況。コレ全部回収しなきゃいけないの？イヤ私のためにここまでしてくるのは嬉しいんだけどさ。私のためってのは十分伝わったから、だからもう少し限度ってものを覚えよう？コ

レこのままだと外の世界まで流れてくかもしれないんだよ？いきなりひな人形がこんな大量に流れてくきたら事件だよ？誰が回収するの？……………私？

私がコレ全部回収するの？こんな寒いなか？

……………泣きそう。

私が半泣きで延々と流れてくるひな人形を回収していると、誰かに唐突に呼び止められた。

「あら？雛じゃない。貴女は何でこんなところに……………というか、貴女はここで何をしてるの？」

咲夜だった。そういえば私の呼び方が呼び捨てになっている。いつから変わったのか明確には覚えていないが、割とすぐが変わっていた気がする。少なくとも秋には変わっていた。

おっと。そんなことより、さっきからジト目でこっちを見つめてくる咲夜に状況を説明するほうが先かな。こんな寒い日に濡れ鼠になりながら川に浮かぶ大量のひな人形を回収している姿を見ればそんな目になるのも分かるが、断じて好きでやっているわけではないし、不可抗力なのでその目はやめてほしい。

咲夜に事情を話した数秒後、私の隣には大量のひな人形の山が出来上がっていた。横を見ると、そこそこ大きな網を持った咲夜が一仕事終えた顔で佇んでいた。どうやら私に代わって人形を全て川から引き上げてくれたらしい。呆然としている私に対し、会話の続きだといつかのように咲夜が口を開く。

「雛、そのままだと風邪ひくわ。お風呂貸してあげるから、うちにいらっしやい」

……………とところで濡れた手紙のようなものがひな人形の背中にくっついた形でいくつか流れてきてたけど、あれはなんだった

のだろうか……………

大量のひな人形を一旦その場に残し、私は咲夜とともに最近すっかり馴染みになった紅の洋館に来ていた。異変直後に招かれて以来、私は最低でも週に一回は紅魔館を訪れている。

「おねーちゃん！」

「う、わ」

此処での出来事を回想しながら脱衣場から出ると、私が此処に招かれる最大の原因がタツクルしてきた。

——あの、フランちゃん？今までなんとか衝撃を抑えてるけど、吸血鬼の力でタツクルされると私潰れてもおかしくないからね？そろそろタツクルじゃなくて別の愛情表現にしない？

「えへへ」

遠回しに伝えているのだが、フランちゃんはへにやりと笑うだけで止めるとは一言も言ってくれない。

——あークソッ！かわいいなあ!!でも誤魔化されないんだからね!!いつかきつと止めさせてやる!!

そんなことを考えつつも、フランちゃんを肩車して紅魔館の廊下を歩く。向かうはいつも使っている応接室。応接室の扉を開けると中には紅茶とお茶請けを用意している咲夜とソファでくつろいでいるレミリアがいた。ここまではいつも通り。しかし、いつも通りではない箇所がひとつあった。人の出入りに邪魔にならない壁沿いに——

——10段ほどもある立派なひな壇が飾られていた。

ここで、私はようやく今日の日付の意味を思い出した。

「……………あ、そっか。今日ってひな祭りだったっけ」

『だったっけ』って、貴女ねえ」

「まあ、おねーちゃんには気にしなさそうだよね」

咲夜に呆れられ、フランちゃんには苦笑いされた。自分には縁がないと思っていたからかすっかり忘れていた。

——そうか。ひな祭りだから私の日ということか。

そういえば3月3日にドンピシャで人里を訪れたのは今日が初めてな気がする。思い返してみれば、今まで今日ほどではないにしろ流し雛の数が多い日はあった。確かに季節は決まって春に入りかけた頃だったから、その日がひな祭りだったのだろう。

——それにしても立派なひな壇だ。ただ、これ程のものが紅魔館にあるとは思わなかった。もしかして前々からあったのだろうか？

「ええ、そうよ。やっぱりフランのためにも用意しておかなきゃって思ってた前々から——」

「いえ、これは今回急遽用意したものよ。お嬢様はなんでも形から入ろうとするところがあるから」

「ちよ、ちよつと咲夜！それは言わないでつて言つたじゃない!!」

ふと疑問に思つたことを聞いてみると、レミリアが見栄を張ろうとして咲夜に内情を暴露された。いつも通りの光景で安心する自分がいる。一方、フランちゃんは上機嫌でお菓子を頬張っている。上機嫌な理由はお菓子がおいしいのもあるだろうが、姉が『フランのため』と公言したのが大きいのだろう。

その後、いつもと同じように紅茶を飲みながら歓談し、いつもと同じように夕飯をご馳走になった私は、名残惜しくも紅魔館をあとに自宅に向けて飛び立った。

.....あ、そうだ。川のほとりに放置してあるひな人形回収しないと.....

長い1日を終えて、やっと妖怪の山の麓にある我が家に帰ってきた。楽しかったけど……さすがに疲れた。

自分以外に住人のいない和風建築の家はさすがに寒い。ちなみに外見こそ和風ではあるが普通に洋間がありベッドもあるし、なんなら暖炉だって付いている。とりあえず暖炉に薪をくべて火を……あれ？

そこで私はようやく気づいた。

……薪が、ない。

その他、燃料になりそうなものがほとんど枯渇している。

あー、思い出してみれば、確かに昨日は寒かったし、酒に酔っていたのもあって、残り少ない燃料をほとんど投入した記憶がある。尤も、燃料の残りから考えて、遅かれ早かれ陥っていた事態ではあるのだが……

あ、あはは……やらかした。

……どうしよ。

……どうしよ、どうしよ、どうしよ!!!

え？さすがにこの状況はマズくない!?

妖怪だしさすがに死なないよね!?

と、とにかく家中から毛布を引っ張りだして……

そのとき、冷たい隙間風が私の頬を撫でた。同時に思い浮かんだのは『人里の守り神、自宅で暖を取れず凍死する!』というなんとも不名誉な題名で書かれた新聞だった。私は自分がかかり追い込まれた状況であることを今さらながらに理解した。

と、とりあえず誰かに頼るか。
といつてもこの状況で頼れる相手となると――

「はい、こんな夜更けにどちらさま……つて雛!? どうしたのよ急に
!? そんなこの世の終わりみたいな顔して!!」
「あ、アリス………」

……だ、」

「………だ?」

「暖をとらせてください……」

「………はっ……」

レベルである。

その点アリスの家はいいね！いい感じに気心しれた仲だし、どんな魔法か知らないけれど、エアコンがついているかと錯覚するほどの暖かさを保っている。むしろこれからの冬は、毎年此処に居候できないかと考えるほどだ。

——なんで人里じゃないのかつて？ダメダメ。人里なんかで泊まったら薪なんかの備蓄を空にする勢いで私に献上してくるか、またお祭りが始まるに決まってる!!（確信）

そんなわけで、2ヶ月ほど前から私はアリスの家に住んでいるというわけだ。アリスは今お昼を作っていて、私は上海を始めとした人形たちと遊んでいる。

——さすがアリス！人形たちみんなかわいい！

「雛ー。っ飯できたわよー」

そうこうしているうちにお昼ができたらしい。私のいる部屋に入ってきたアリスは、人形まみれになっている私を見るなりこう呟いた。

「いつも思うけど、そうやって雛が人形たちと一緒にいると、ひとつだけ大きな人形が混ざっているように見えるわね」

「そんなことないと思うけどなあ。それに、アリスだって人のこと言えないと思うよ」

——そういうことはまず鏡を見てから言ってください!!人里の子供たちから『お人形さんみたい!』とか言われてるの知ってるんだから!やっってる人形劇が大人気なのも知ってるんだからね!私?もちろん見かけた場合は全部見てるわ!

「なんかごめんね？いつもご飯作ってもらっちゃって」

「これぐらい別になんでもないわ。それに、材料はいつも雛持ちじゃない」

「でもあれは人里の人たちがタダ同然でくれたものだし」

「相変わらず愛されてるわね。いいことじゃないの」

他愛もない話をしながら食事が進む。ここ2ヶ月ですっかり日常となった風景だ。アリスが作るご飯はおいしいし、目の前には微笑んでるアリスの姿。

——あー、良いわあ。私を見るなり抱きついてくるフランちゃんもかわいいけど、こういう目の前で原作キャラが微笑んでくれてる日常もいいよね！私はいますっごく幸せです。

これで異変が無ければ最高……いや、違うな。異変が起きないと交流できるキャラが増えない。そうだな。異変は起きるけど私に被害がなく解決されるのが一番いい。幸い私は鍵山雛だ。唯一異変に関わるであろう風神録にしても、相手は顔見知りの霊夢ちゃんと魔理沙ちゃんだけ。場合によっては戦闘なしで終われるだろう。……あれ？……これって現状が最高の状況なんじゃ？

くっツ!!雛に転生したときは原作の情報少なめだしどうなるかと思っただけで転生したのが雛で良かった!!!

——やったね！雛ちゃん大勝利!!

そんなことを考えながら食後のデザートを堪能する雛は、アリスが妖々夢のボスとして登場していたことなどすっかり抜け落ちていたのだった。

人形使い、アリス・マーガトロイドにとって、鍵山雛との出会いは本当に偶然だった。人里で定期的に行う人形劇の準備をしていたと

ころ、たまたま雛を連れだした里の子どもたちが通りかかり、そのまま子どもたちと劇を見ていったのが始まり。そこからたびたび劇を見に来てもらえるようになり、いつしか友人としての付き合いに変わっていった。

そんな、いつ友人になったかを明確には決められない相手ではあるが、アリス自身は初めて会った時から彼女のことを覚えていた。理由としては、彼女の見た目——服装も勿論ある。基本的に和服が圧倒的に多い人里では彼女のような洋服、それもゴスロリに近いような服は当然目立つ。生地が赤色なのもあり、遠目でも一発で分かるほどだ。しかし、それよりもアリスの印象に残っているのは、彼女の笑顔だった。

——子どもたちに手を引っ張られて。

——私の人形劇を見て。

——上海たちと触れあって。

微笑む、笑う、破顔する。

アリスから見た雛は、まるで、どんな小さなことにも幸福を感じているかのような、そんな少女だった。

そんな少女が珍しく顔色を悪くして訪ねてきたときは何事かと慌てたものだ。話を聞いてみれば暖房の燃料がきれたから避難させてほしいという。確かに冬が長引いているが、避難までするほどかと呆れたものだ。同時に、私の心配を返してほしいとも思った。

そして、雛がマーガトロイド邸に居着いてから2ヶ月。

「もう2ヶ月………なのよねえ」

そう呟くアリスの視線の先で、雛はソファで横になり静かに寝息を立てている。穏やかな表情で雛に毛布をかけながら、アリスはことの

経緯を回想していた。別に迷惑に思っているわけではない。単純に友人として迷惑だと思わないぐらいに好意を持っていることもあるし、衣服に関して数少ない相談相手であることもあるし、魔法使いとして厄を纏わない厄神が興味深いのもあるが、何より楽しいのだ。彼女と過ごすのは。

アリスは雛とは反対側のソファに座り、紅茶が入ったカップを片手に思考を続ける。というのも、アリスはこの頃雛についてよく考えることがある。

——珍しい。

それは、雛が居着いて割とすぐに考えついたことだった。

そもそも彼女が——出かけることはあれど——一ヶ所に留まっている今の状況こそが珍しいのだ。彼女はあれで意外と気まぐれなところがある。放浪癖、と言うと言い過ぎかもしれないが、彼女はいつも（定期的に顔を出す人里と博麗神社を除いて）あつちにふらふらこつちにふらふら、幻想郷中を渡り歩いているのである。

紅霧異変以降、顔を出す先に紅魔館が追加されたものの、彼女の気性はこれと違って変わっていない。それを考えれば、2ヶ月に渡って此処に定住していることが、どれだけ珍しいかが分かるというものだ。あるいは、彼女にそうさせるこの異変の主がすごいのか。

「……………まあ、異変については今はいつか」

——なににせよ、普段すぐには捕まえられる友人と、もう少しの間ゆっくり暮らせるのならそれも悪くない。

そんな考えが浮かぶぐらいには、人形使いの少女は雛に対して好意を抱いているのだった。

1時間後、雛と同じようにソファで寝息を立て始めたアリスに毛布をかける小さな影がいたが、その光景を知る人はいない。

悲しくて、春

「妖怪が鍛えたこの楼観剣に、斬れぬものなど、あんまり無い！」

白玉楼の庭師、魂魄妖夢が叫ぶと共に戦闘が開始される。

相手は――

――そうです私こと鍵山雛です。

本来なら『原作のセリフを聴けたよやったね』なんて考えるところだが、今の私にそんな余裕はない。

ねえ、なんで？

なんで私は異変解決に駆り出されてるの？

なんで妖夢と1対1で対峙してんの？

なんで自機組がこの場に誰もいないの？

いやホント、誰でもいいから早く代わって!?

開幕から突っ込んでくる妖夢に対し心の中で絶叫しつつ、私は仕方なく弾幕で迎え撃った。

事の始まりは妖夢とぶつかる2時間前に遡る。

マーガトロイド邸でアリスと共にくつろいでいた私は、唐突に鳴ったチャイムに意識が現実を引き戻されるのを感じた。アリスが多少めんどくさそうにしながら玄関に向かうのを見ながら、私自身はどうするかを決めかねていると……………

「魔理沙に霊夢に……………咲夜？」

困惑と少しの驚きを含んだアリスの声が聴こえてきた。この時期に魔理沙、霊夢、咲夜の組み合わせで行動するなら思いあたるものはひとつしかない。

――そっか。もう少しで異変が解決されるのか。そういえばアリ

スは妖々夢の3ボスだったっけ。まあ、私は巻き込まれることもないだろうし、後で挨拶だけでもしておくかな。

この時、のんきにそんな事を考えていた私を殴りたい。どうあれ、私が思考している間にも自機組対アリスの弾幕ごっこが始まったようだった。私は弾幕ごっこが終わったのを見計らって3人の前に姿を現す。おもいつきり異変に巻き込まれるなどとはつゆ程も考えずに。とりあえずボロボロのアリスには肩を貸しておこうか。

「あれ、雛？なんでお前がここに？」

私を見て、まず話しかけてきたのは魔理沙だった。その声音には驚きと疑問が半分ずつ含まれているような気がした。声にこそ出さないものの、霊夢と咲夜も心情的には同じだろう。

ところで、私はこの時自機組……………いや、正確には霊夢に関して、あることを思い出していた。

——博麗霊夢は異変解決に際して、目につく人妖は片っ端からぶっ飛ばすを地で行く少女ではなかったか？

自分の顔が徐々にひきつっていくのを感じる。私の表情の変化を敏感に感じ取ったのか、魔理沙からの視線が容疑者に対する疑惑の視線に変わっていく。

「ははーん？さては、お前が異変の主犯……………なわけないよな！雛がこんなことするわけないもんな!!」

感じた疑惑のままに魔理沙が発言しようとしていきなり撤回した。いったいどうしたのだろうか？友人とはいえ怪しいと思った以上、気を使って言い止めるような性格ではないと思うのだが。よく見ると若干顔が青ざめている気がする。なにかあったのかな？

そんなことを考えている間に魔理沙が会話を再開させた。

「でもなんでそんなにひきつった顔して……………まさか、霊夢。お前のせいかな？」

「……なんでそうなるのよ」

「イヤ、お前異変の度に通りがかるヤツ片っ端から倒していくじゃねえか。雛はお前に退治されると思ってんじやないのか？」

——その通りです。とはさすがに言えなかった。

「……………別に雛が異変を起こすとは思わないわよ……………」

うん。霊夢。その信頼は嬉しい。嬉しいけど、その前の間はなんなの!?!わたし、すつごくきになる!!

「まあ、それはそれとして。雛、貴女ホントになんて此処にいるの?」
今まで傍観していた咲夜が話を進めようと話しかけてきた。情けない話なのであまり言いたくないのだが、異変の容疑者にされても困るので私は正直にことの経緯を話した。

霊夢と魔理沙の視線が少しずつ同情を含んだものになっていったのは見なかったことにしたい。一方で咲夜は「どうせなら紅魔館に住み込めば良かったのに……」と残念そうにしている。

——いや、あの、ご、ごめんね?一応最初に思いついたのは紅魔館だったんだよ?

話が逸れたが異変の原因の春度についてアリスから説明を受け、魔理沙と咲夜は春を探しに再び空へ飛び立とうとし、アリスは怪我の手当てとポロポロになった自身の服の修繕のため家の中へ引っ込んでいく。

——その最中。

これ以上は私には関係ないだろうし、と思い。アリスと共に家の中へ入ろうとした私を引き留めたのは、霊夢が何気なく言った呼び掛けだった。

「雛、行くわよ」

なに他人事のように考えているんだ、とばかりに名指しされた。

「……………へ?」

驚きのあまり変な声が漏れた。

「そうするといいつて、私の勘が囁いているの」
なんでもないように霊夢が補足する。

——え？私も連れてく？ドコに？

——……………異変解決？お願いだからやめて？（切実

百歩譲って異変解決について行くのはいい。自機組の後ろをついて行くだけなら戦闘をする必要もないだろうし。だからプリズムリバー三姉妹との戦闘が私抜きのみで行われるのも納得している。ただ、「弾幕ごっこを見ているのは危険だから」と私だけが先に冥界に踏み込むというには納得するべきではなかったのだ。

冥界に入った直後の場所で自機組を待っていた私は、ものの見事に妖夢に見つかり、一方的に敵対されるに至っているのだから。

「妙な気配を感じて来てみれば……………あなたは誰ですか？」

「んと、私の名前は……………」

「あなたの目的はなんですか？花見ですか？」

「いや、あの……………」

「花見に来たのであるなら、本来であれば歓迎したいところ……………」

「ねえ聞いて!?!私は……………」

「ですが！あいにくとこの先は死者の領域。生者は力尽くでも、お帰り願いますー!」

「……………」

妖夢が話を聞いてくれない。

……………あれかな？ゲームのイベントシーンか何かかな？それとも突っ込み待ちとか？

「私の名前は魂魄妖夢。妖怪が鍛えたこの楼観剣に、斬れぬものなど、あんまり無い！」

そんなこんなで冒頭に繋がるのだった。

妖夢との弾幕ごっこが始まって3分。

逃げの一手。

私の行動はそれに尽きる。

牽制の弾幕をばらまきながら、突っ込んでくる妖夢に対して逃げ回っているのである。

勝利への道筋は全く見えていないが、それもそのはず。弾幕の密度が濃いわけでもなければ、飛ばしている弾の大きさも霊夢や魔理沙が飛ばす通常弾の半分程度しかないのだから。

——昔はもうちよつと大きくて黒っぽい弾幕たまが打てた気がするんだけどなあ。

しかし、強力な弾幕が飛ばせないこと以上に私の行動を制限しているものがある。

——人としての心だ。

結局、いくら私が鍵山雛となり空を飛べるようになれど、弾幕が撃てるようになれど。所詮、私は転生前に持っていた人の心を捨てきれしていないのだ。すなわち、相手を傷付けることを嫌悪する倫理観と、死や怪我に対する恐怖心。弾幕ごっこが如何に相手の命を奪わない

ための決闘であろうと、実際に自分自身で戦う決闘に対し、積極的に参加する気にはなれなかった。仮にこれが誰かを守るためならば、そして、それに死の可能性があるのなら、逆に恐怖心を押し殺して戦ったり庇ったりすることもできるのだろう。守るために。しかし、現状ではこれらの条件に当てはまっていないし、私が倒れたところで自機組本命が後から来るだけだ。

劣勢な中でさらに考え事をしていた私は――

「……修羅剣『現世妄執』!!」

――自分でも驚くほどあっさりと光の奔流に呑み込まれていった。

ナイフの下にて春死なむ

紅霧異変で人里に霧が効かなかったのは鍵山雛が要因だと、普通の魔法使い、霧雨魔理沙が知ったのは去年の秋頃だったか。異変以降、図書館の書物を目的に度々紅魔館に訪れている彼女は必然、雛が紅魔館に入り浸っていることも知っている。時に館の前ですれ違い、時にフランを交えて共に遊んだりした。そんな中で、紅魔館の住人と雛に関する話題で盛り上がることは珍しくなかったし、話の流れで紅霧異変が話題に上がったのもおかしいことではなかった。

話し相手だったのはレミリアと咲夜。

雛の調査を行った咲夜に聞けば、人里での聞き取り調査で一発だったという。

——いくら人里は居心地が悪かったとしても、やはり聞き取り調査ぐらいはしておくべきだったか。

当時、怪しいモノを探すのに必死で聞き取り調査など最初から選択肢の外に追いやった魔理沙は、そんなことを頭の片隅で考えながらも雛について思い出していた。

雛のことなら前々から知っている。そこらの妖怪や神とは対極にいるような穏やかな性格をしている厄神様だ。香霖堂でたまに見かけるから面識もあったし、博麗神社で霊夢と一緒に雛が作ったご飯を食べたこともある。だが、あのいつも穏やかでニコニコしている雛が、霧を消すなどという大胆な行動に出るとは思わなかったのだ。尤も、レミリアによれば能力の無意識的な発動だろうということだったが。

ともかく、(なぜ祭りを開いていたのかは謎だが)人里の人間が霧を対処していたわけではないと知り、あの時の人間に対する恐怖は勘違いだったと安堵していた魔理沙は――

『……………それにしても、あの雛を軟禁できるって、人里はどうなってるのかしらね?』

——レミリアの発言によって、上げて落とされる気持ちをもつて体感した。

雛に霧が効かなかった要因はともかく、人里に対する認識が余計や
バいものになったのは確かだった。

「雛？なんでお前がここに？」

そんな雛が、成り行きで霊夢と咲夜を交えて異変解決に向かっていた
最中にアリスの家から出てきたときは大分驚いた。

雛は私達を見るといつも通りにこやかに挨拶しようとして
……………唐突にフリーズした。心なしか笑顔が引きつっている気が
する。

「ははーん？さては、お前が異変の主犯……………なわけないよな！雛
がこんなことするわけないもんな!!」

思いついた疑念を口にしようとして私はすぐさま撤回した。雛か
らは見えてないだろうが、雛の後ろ側に立つアリスと私の真後ろにい
る咲夜からの圧力が怖かった。

「でもなんでそんなにひきつった顔して……………まさか、霊夢。お前
のせいかな？」

不穏な空気を払拭するために私は慌てて霊夢へと矛先を向ける。
思いつきを声にしただけだったが、言ってみて割とあり得そうだと
思った。なんとたってこいつには前科が多すぎる。

「……………なんでそうなるのよ」

「イヤ、お前異変の度に通りがかるヤツ片っ端から倒していくじゃ
ねえか。雛はお前に退治されると思ってるんじゃないのか？」

「……………別に雛が異変を起こすとは思わないわよ
……………」

答えまでの間が霊夢の心情を如実に表している気がした。

その後、雛が此処にいる理由とこの異変の原因を教えてもらった私
達は早々に出発しようとしたのだが……………

「雛、行くわよ」

「……………へ？」

なぜか雛も一緒に行くことになっていた。

「そうするといいつて、私の勘が囁いているの」

決定事項だと言わんばかりに霊夢が飛び立ち、雛が玄関先にあったコートを手にとつて慌てて追いかける。

理解が追いつかず出遅れた私と咲夜は一足遅れて二人を追いかけるはめになる。長い付き合いゆえに今さら霊夢の勘を疑うことはないが、懸念はあった。

——別に雛を連れていくのは構わないが……………

……………ただ、アイツ弾幕ごっこは弱くなかったか？

霊夢、魔理沙と共にプリズムリバー三姉妹との3対3の勝負を制し、冥界へと踏み込んだ咲夜の目に飛び込んできたのは——

——目を回している雛と、傍らに立つ抜き身の刀を持った白髪の人影と人魂だった。

その光景を目にした瞬間、咲夜は自身があの人影を倒すことを決めた。が、一先ずは時間を止めて雛を抱き上げ、霊夢と魔理沙の傍に寝かせた。能力を解除すると、理解が追いつかず固まっている下手人の少女を気にすることなく二人がよってくる。

「ひ、雛？大丈夫か？」

「別に、そのくらいで倒れるようなヤツじゃないでしょ」

「イヤ霊夢。お前が連れて来といてそれはかわいそうだろ」

一見雛を蔑ろに扱っているように見える霊夢であるが、その目には確かな信頼が見て取れた。そんな会話をしている間にフリーズから復帰したのか、少女が警戒気味に声をかけてきた。

「彼女に続いて、今度は生きた人間が3人も……ここは冥界。生者がいて良い場所ではないんですが」

少女が刀を構えると同時、霊夢と魔理沙もお祓い棒とミニ八卦炉を構えるが、咲夜はそれを手で制して発言した。

「霊夢、魔理沙。ここは私が受け持つから、貴女達は先に行きなさい」「ん、分かったわ」

「いや、そんなわざわざ時間稼ぎみたいなことしなくても三人で……」

「行きなさい」

「ツ……わ、分かったぜ」

咲夜の言葉を受け、迷わず飛び出した霊夢をやや顔を青ざめさせた魔理沙が追っていく。

「あ、待ちなさ……ッ!!」

慌てて追い継ろうとする少女に咲夜はナイフを投げて牽制し、霊夢と魔理沙を先に行かせる。

——さて……この相手とどうやって決着を付けるか……

咲夜は頭の中で思考する。

——弾幕ごっこの結果なのだし怒るのは理不尽じゃないの？

理性が私に待ったをかける。

——あなたは友人を傷つけられて不問にするの？

感情が私に仕返せと囁く。

——重傷と言えるほど傷つけられたわけでもないし、抑えて抑えて。
理性が行動を抑えようとする。

——弾幕ごっこの中でなら報復ぐらいしてもいいじゃない。
感情が免罪符を持って背中を押す。

気絶しているとはいえ、傍にいる雛に対して悪い印象を与えたくないのもあり、咲夜はすぐには決断出来ずにいた。

そんな状況で、彼女の頭の中には唐突に彼女の主とその妹である吸血鬼の姉妹が現れた。

『私の友人が傷つけられたのよ？咲夜、やってしまいなさい』

『おねーちゃんがやられたんだから仇は討たないと。ね？』

そして、咲夜は相手への対応を決めた。

「……………ん、んん？」

「あら、気がついた？」

頭に柔らかい感触を感じて私は目を覚ました。視界いっぱい広がっていたのは咲夜の顔。起きたばかりでボーツとする頭をゆるゆると動かし、なんとか周りの状況を把握しようとする。私はどうやら石畳の上に寝っ転がり、咲夜に膝枕されているらしい。記憶を辿ると妖夢との弾幕ごっこで記憶が途切れている。

——ああ、妖夢に負けたのか。

特に悔しさがこみ上げてくることもなく、すんなりとその事実を受け入れられた。むしろ負けたお蔭で咲夜に膝枕してもらっているとさえ思えば役得ですらある。そんなことを働かない頭でぼんやりと考えていた私であるが、さすがに咲夜の顔を見つめ続けるのはなんとなく気恥ずかしくて、顔を横に向けた。

横に向けた視界の先の方に見えるのは、おそらくは白玉楼に続く階段と、その手前で倒れているハリネズミと——

——『ハリネズミ』？

「え、……………え!？」

寝ぼけたままだった意識が一瞬ではつきりした。

白玉楼に続く階段は別にいい。問題は、その手前に倒れているナイフまみれの『妖夢』^{ハリネズミ}である。私は、微笑みながら私の頭を撫でている咲夜に、恐る恐る話を聞くことにした。

「あ、あの……………咲夜?」

「どうかしたの? 雛」

咲夜は笑顔である。

「あれ……………なに?」

「……………ナイフの山ですわ」

——確かに! 確かにナイフの山だけでも!!

私は再度咲夜に問いかける。

「咲夜、あれなに?」

「……………ハリネズミですわ」

——言っちゃった! ハリネズミで確定しちゃったよ!! そしてなぜに敬語!!?

再三、咲夜に問いかける。

「咲夜、あれ……………なに?」

「……………門番?」

頬に人差し指を当てて考えてる仕草はかわいい。かわいいんだけど……………門番って、妖夢が偶々白玉楼の前にいたから門番だと思っただの?

……………それとも、昼寝が仕事になってきてる美鈴の代わりにナイ

フでハリネズミにして八つ当たりして、日頃のストレスを発散したとか!?

ともかく、そのままにしておく訳にもいかないので妖夢からナイフを抜いて介抱してあげる。全身にナイフが刺さった見た目はバイオレンスな光景でも、元が弾幕ごっこの弾幕用のナイフだからか深い傷は全くなく、逆になんでナイフが刺さったままだったのか不思議なくらいに傷は浅かった。

咲夜は何も言わずに私の手伝いをしてくれた。自分がやったこととはいえ、先ほどの私からの質問にも答えるまでに微妙な間があったりと、やり過ぎたとは思っているらしい。

「……………うん? あ、あなたたちは……………」

幸い、ものの数分で妖夢は目を覚ました。起きたばかりで自分が置かれている状況が理解できていないらしく、その表情からは困惑がありありと伝わってきた。

——ちょうどその時だった。

——白玉楼から盛大な爆音が聞こえてきたのは。

「っ! 幽々子様!？」

一瞬で意識を覚醒させた妖夢が私達に構わず白玉楼に向かって飛び出し、突然のことに目を白黒させていた私と咲夜が少し遅れてそれに続く。

白玉楼に到達した私たちの視界に入ってきたものは——

——不穏な空気を醸し出す、巨大な桜だった。

春の解放

「……………なんだよ、アレ」

目の前の桜から不穏な弾幕が放たれる現象に、弾幕を避けながらも魔理沙は困惑していた。

事が起こったのは異変の黒幕である西行寺幽々子に霊夢と共に弾幕ごっこを挑み、魔理沙自身は一撃もらってしまったが、あと一步で勝利というところまできた時だった。戦いの舞台となっている白玉楼の庭に植えてある一際大きな桜——妖怪桜であり西行妖というらしい——が、突如として光を纏ったのだ。そして、桜自身が点滅するかのように発光した直後、弾幕の第一射が放たれたのだった。

「幽々子様!!」

「ッ！妖夢!!」

敵味方関係なく無差別に放たれる弾幕を回避しながら魔理沙が一人呟いた直後、弾幕の第一波が終わると同時に名前を呼ぶ声が聞こえてきた。目の前の桜を警戒しながら声の方向に視線をやると、雛を倒した少女が幽々子に駆けよっているところだった。少女の後ろには追っつけてきている雛と咲夜の姿もある。

「……………ッ!!これはいったい!?!」

西行妖の異変を感じとった妖夢がすぐさま幽々子の前で構える。ほぼ同じタイミングで雛と咲夜が到着した。

「これは……………どういうこと?」

「さあな、わからんぜ」

「こつちが聞きたいぐらいよ」

時間を止めたのだらう、一瞬で隣に現れて事情を聞いてくる咲夜に魔理沙と霊夢は揃って答えた。

——その直後、

桜から弾幕の第二波が放たれた。

——黒い。

魅せることを前提とした弾幕ごっこ用の弾幕とは違う、どす黒い色をした、不吉な感じがする弾幕。理性ではなくそのもつと奥、本能とでもいうべきものがあの弾幕に当たってはいけないと頭の中で警鐘を鳴らしている。その場にいる全員が回避に集中する。

そんな中、魔理沙が気づけたのは偶然だった。

「ツ！雛っ!!!」

無差別に周囲にばらまかれるだけだった先程と違い、今度は周囲に放たれる弾幕の内、半分ほどが雛めがけて飛んでいった。そしてそれを、雛は特に避ける素振りもせず見つめている。

そして……………

弾幕は雛に当たった瞬間に消えた。雛は特にダメージを負った様子もない。

「な、なんだ？雛は平気なのか？」

そう呟いた魔理沙は自分に向かって放たれる弾が少なくなっていることに気づく。少し離れて全体を見回してみると、辺りに放たれていた弾幕が徐々に雛に向けて収束していくのが見えた。同時に、雛はあの桜に向かって一步一步近づいて行っている。

まるで、あの桜が雛を脅威だと思っているかのような。もしくはあの弾幕を、雛が強引に引き寄せているかのような。そうして妖怪桜から放たれる弾幕が雛の方へ行き、雛に触れた瞬間に消えている。

あれではまるで——

「雛が……吸収しているの？」

魔理沙がうつすらと考えたことを咲夜が呟く。

一体どんな原理なのかと魔理沙が考えを巡らせるより先に――

――雛が、西行妖に触れた。

そこからの変化は絶大だった。

――放たれていた弾幕が止まり、

「これは……………春、か？」

――西行妖から桜の花びらの形をした『春』が放出されていく。

そして春の放出が止まる頃には、西行妖から感じられた禍々しさが意識しないと分からないぐらいには薄れていた。

「……………ふう」

桜から手を放した雛はため息をひとつつき振り返る。

「霊夢、魔理沙、咲夜。……………帰りましょうか」

一仕事終えたかのような、若干の疲れと達成感が入り交じった笑みだった。

咲夜と共に白玉楼に突入した私の視界に入ってきたのは……………

――無傷で泰然と構える霊夢。

――一回被弾したみたいだがまだまだまだ平気そうな魔理沙。

――何発かもらって傷ついている幽々子。

――幽々子の前であるモノを警戒する妖夢。

……そして――

(あれが、西行妖………)

――妖しい光を放っているかのような迫力のある、巨大な桜だった。

妖怪化しているとはいえ、さすがは多くの人が魅せられてきた桜だ。その外観は、見事の一言に尽きた。

そんな、ある種の裏ボスでもあるこの桜を初めて生で見た私は――

………触れてみたいな。

――そう、思ったのだった。

今にも満開となつて暴走しそうな妖怪桜を前に何を考えているのかと言われるかもしれないが、考えてもみてほしい。

転生する前。原作のゲームを始めとして、漫画やイラスト、小説で表現されていた愛すべきキャラクターたち。私にとつて現実となつた、魅力的なヒトやモノ。それらに触れてみたい、触れあいたいと思うのは自然な感情だった。

そんな考えの下、一歩踏み出した私を拒絶するかにように西行妖は弾幕を放ってきた。

――だが、

(この弾幕………厄で構成されている?)

なぜか厄を纏うことがなくなったとはいえ腐つても私は厄神。その構成要素が厄であれば、見分けることぐらいはわけないのだ。

……言つて悲しくなってきた。

ともかく、弾幕が厄であり、私に近づいてくるというのなら、この状況は紅霧異変の時と……いや、いつもと同じだ。周囲の厄が私の能力で集まってきた、なぜか消えてしまうだけの現象。

私の推測を肯定するかのようには、西行妖から放たれる弾幕は徐々に私へと集まってくる。そして、私に触れる直前で消えていく。

なぜ西行妖の弾幕が厄で構成されているのかはよく分からないが、弾幕が私にとって脅威には成り得ないことは分かった。

——今ならいけるのでは？

一歩一歩、西行妖に近づいていく。

弾幕をかたどった厄たちは、ことごとく私に向かって飛んできて、当たる直前で消えていく。そして——

——タツチ

私は西行妖に触れた。その巨大な桜の幹に触れていることに感動し、暫しの間呆然としていた。気が付くと、いつの間にか西行妖が放つ弾幕も止まっていた。

「……………ふう」

効かないと知ってはいても弾幕の中を突き進んだからか、気疲れなのだろうが妙な倦怠感がある。ともあれ、この見事な桜に触れることが出来て私は満足だった。幽々子が少し傷ついている辺り黒幕との決着も付いているようだし、もう帰つても大丈夫だろう。

「霊夢、魔理沙、咲夜。……帰りましょうか」

——というか、帰してくださいお願いします。

一仕事終えたと言わんばかりの雛と現状を見て異変が解決したと判断した咲夜は挨拶もそこそこに先に帰っていった。

一方で、私と魔理沙はその場に残っていた。私は博麗の巫女として異変の黒幕と決着を付けなければならぬし、魔理沙も完全に決着を付けたみたいだった。あの妖怪桜の邪魔が入って止まっていたが、最終戦の決着はまだ付いていないのだ。私は弾幕ごっこを再開しようとして――

「あらあら、仕方ないわね……。妖夢？」

「……あ、はい。なんででしょう」

「宴会にしましょう」

「……………はい？」

「……………えっ？」

——おもいつきり出鼻を挫かれた。

……………宴会？

「だあって、春はあの子に奪い返されちゃったし？異変続けても意味ないし？そもそも異変続けられないし？」

「……はあ」

「だから異変はもうおしまい！異変が終わったら宴会するでしょ？」

「まあ、幽々子様がそれでかまわないのでしたら……」

「……………」

あの子を……………雛を、白玉楼[□]まで連れてきたのは間違いなく私だ。私は自分の勘を信じただけだし、実際雛がいなかったらあの桜の対処には手間取っていただろう。だから私の判断が間違っていたとは思わない。

……………ただ、

——寒い中冥界^{異世界}まで異変解決に来て……

——おいしいところは雛に持っていかれ……

——挙げ句はラスボス戦が不完全燃焼で終わり？

——そんなの、そんなの………

「………納得できるかあ!!!」

複雑な感情を爆発させた私と魔理沙は揃って幽々子に再戦させろと詰め寄るのだった。

冬が長引いた異変の解決から数日後。主とその従者が異変解決の宴会のために外出し、無人となった白玉楼に侵入する人影があった。彼女は庭に存在する西行妖へと近寄っていき、なにやら調べているようだった。

「……西行妖の本質とも言える部分が大幅に弱体化してるわね。大方、西行妖が纏っていた不吉なものを厄として吸い取ったと言ったところかしら。そして、西行妖の弱体化に伴って、取り込んでいた春が一気に放出された訳ね」

彼女は桜については一通り調べ終えたらしく、立ち上がり空間に裂け目を作った。周りに人がいないこともあり、彼女は独りごちる。

「全く、起きて早々に幽々子がこの桜の封印を解こうとしてると聞いたときは大分取り乱してしまっただけど、大事に至らなくてよかったわ」

空間の裂け目に入っていく彼女の頭の中には、彼女の友人である少女が浮かんでいた。その頬には微かに笑みが浮かんでいる。

「また、貴女に助けられてしまったわね……………」

……………雛」

妖夢の人里探訪

春雪異変が解決されて一週間。幻想郷は様々な花達が一齐に満開の時期を迎えていた。花見としては定番の桜はもちろん、本来であれば桜とは時期が被らない梅など、2月から5月の間に開花する花たちが一齐に咲いているのである。

普段では見ることでできない光景とあって現在では人妖問わず様々な場所で花見が開催されているし、同時に幻想郷の至るところでテンション高めなフラワーマスターが目撃されたりもしている。

なお、開花時期が異なる花たちが一齐に咲いている理由は至って単純である。暦の上では5月とはいえ一週間前までは1月と似たような気温が続いていたからであり、奪われていた春が解放されたことで本来の季節に追いつこうとしている証拠でもあった。

そんな中、相も変わらず参拝客がない博麗神社に降り立つ影が一つ。

「あの、霊夢さんいますか？」

「ん、妖夢？」

先の異変において、主犯の従者として立ち塞がった魂魄妖夢その人だった。

妖夢が霊夢に通された居間には既に先客がいた。

「あら？妖夢じゃない。宴会以来ね」

「貴女は確か……アリス、さん？」

「ええ」

ちなみにアリスの目的は霊夢から預かっていた巫女服の返却——もとい、納品である。アリスが人形師として裁縫技術に長けているのは周知の事実であり、友人知人から衣服のちよつとした手直しや修復を頼まれることは珍しくないのである。

「それで、妖夢はどうしたのよ。ただ単に遊びに来たってわけじゃないんでしょ？」

「あ、はい。実は……」

——曰く、この前の宴会で幽々子は幻想郷の料理が気に入ったらしい。これまでは冥界で手に入るものや、幽々子の友人である紫が持ってきた食材を使っていたのだが、今回は人里への買い出しを頼まれた。しかし、妖夢は人里の店などは分からないため案内してほしい。

要約すると、妖夢の話はこんな感じだった。

実はこの前の宴会で調理を担当したのは咲夜なのだがこの際それは置いておくとして、霊夢が適任者として真っ先に名前を挙げたのは現在隣に座っている人物だった。

「人里ならアリスに案内してもらったほうがいいわよ？人形劇を開いてるから顔も広いし………あ」

「ちよつと、霊夢？唐突に私に押し付けないでよ。そもそも私はこれから予定が………あ」

「？」

唐突に会話を打ち切った霊夢とアリスを前に、妖夢は疑問符を浮かべる。二人は同じ方向に視線を向けていた。なにかあったのかと妖夢が振り返って確認するより先に、霊夢とアリスは同じ言葉を発していた。

「妖夢、人里の案内にちようどいい人が来たわ」

「ちようどいい人………ですか？」

「ん」

霊夢とアリスが揃って外に指を向ける。指を差した先には——

「……………え？」

博麗神社に遊びに来たらしい鍵山雛が、お菓子の箱を片手に呆然と突っ立っていた。

人里に向かって飛びながら、私は少し前を先導するように飛んでいる彼女について考える。

『鍵山雛』。何故か厄を纏っていない厄神様。

そもそも一般的な認識からすると、厄神として厄を纏っていないのもおかしければ、彼女と触れあっても不幸になることもないというのも厄神様の性質とは正反対である。宴会の時に小耳に挟んだ話によれば、今から行く人里では守り神として敬愛されているのだとか。

そんな厄神の中でも例外中の例外みたいな存在の彼女との出会いは異変の最中さなかだった。あの時は異変を起こしている真つ最中であり、気持ちに余裕がなく、辻斬りのような形で弾幕ごっこを仕掛けてしまったことは申し訳なく思っている。

しかし、彼女の実力に関しては対峙した後も分からないのだ。

弾幕ごっこは私でもあっさりと勝てるぐらいで。そのわりには西行妖を一人で抑えつけることができている。おまけに宴会で鴉天狗から取材された際、彼女はこう答えたのだ。

『西行妖に対して何をしたのかって……………厄を集めたぐらいかなあ？』

なんでもないような軽い調子で話すので、思わず自分の耳を疑ったぐらいだった。

そんな実力が未知数な彼女ではあるが、その人柄がいいのはすぐに理解できた。普通は自分を倒した相手を介抱しようとは思わないだろうし、宴会でも彼女が様々な相手から慕われているのはすぐに分かった。さらには人間たちから守り神と敬愛されるほどとは、いったい何をどうすればそんなことになるのか。

「……………妖夢？」

「あ、はい。なんででしょう？」

「ナニというほどでもないけど……………見えてきたよ」

雛さんからの言葉に思考を打ち切り、前方へ目を向ける。手前に広がる田畑の奥に人間の集落が見えてきていた。人里に近づくとつれ、

徐々に喧騒が伝わってくるようになった。活気があるのが一目で分かる、そんな場所だった。

新しい場所へのワクワクした期待と、半分幽霊な自分が人里に降り立つことへの不安を胸に、私は雛さんが続いてゆっくりと人里に降りていった。

まさか降り立った直後に雛さん共々囲まれて、大騒ぎになるとは夢にも思わずに。

「だーるーまーさーんーが、こーろーんーだー！」

「！！！！！！！！！！」

人里の広場にて、鬼役である雛さんが振り替える。同時に、里の子どもたちが一斉に動きを止めた。

人里についてからなんとか囲まれた人垣を抜け出した後、主に食材を扱うお店を案内してもらいながら一通り巡り、広場で少し休憩しようとした矢先に雛さんが子どもたちに引っぱり張られていった。

「だーるーまーさーんーが、こーろーんーばーない！！」

「！！！！！！！！！！」

再び鬼役である雛さんが振り替える。同時に、里の子どもたちが一斉に地面に寝転んだ。

私は子どもたちを広場に連れてきていたらしい男女数人と雑談をしているのですが……………

——ていうかなんですか!? 『だるまさんが転ばない!』って!? 『転んだ』の逆だから転ばばセーフってことですか!?

「いやー相変わらず、雛ちゃんがいると助かるわあ」

「雛様ほど子どもの相手が上手なやつもそうそうおらんよなあ」

「あの、雛さんがここに来たときはいつもこんな感じなんですか？」

「そうだねえ、子ども相手にはあんな感じかなあ。さすがは雛様だね」
聞けば普段から老若男女問わず人気らしい。手ぶらで来た雛さんが、みんなからの贈り物で両手がふさがって帰る日も珍しくないんだとか。ただ、厄神様相手にここまで受け入れられることができるのもそれはそれで凄いことだと思う。

「でも、皆さんも凄いですよね。雛さんが例外なんだとは分かってますけど、厄神様とこんなにも仲がいいなんて」

私がそう言ったその瞬間。明らかに、周りの空気が変わった。周りの人たちはみんな、どこかバツが悪そうな、後悔しているような、そんな顔をしていた。

「……………あ、あの？」

「……………あ、あぁー……………、実はな。俺たちも最初から、雛様を受け入れてたわけじゃないんだ……………」

「え、そうなんですか？」

正直に言っただけだ。今日軽く見回っただけでも、里内の誰もが雛さんを受け入れているのが当然であるかのような雰囲気だったから。

「ああ。雛様への対応が変わったのも、ここ数年……………よりは前だが、10年は経ってない筈だ」

「10年は経ってないって、過去に雛さんといっただけ何が……………あ、すみません。人里にすら今日初めて入った私が聞いていい話じゃないですね」

深く聞きそうになり慌ててストップをかけた。この人たちの表情をみればあまり触れてほしくない話なのは察せられた。

「いや、いいさ。そうだな……………嬢ちゃんさえ良ければ、聞いてつてくれねえか？」

これだから半人前なのだと落ち込みかけていた私が俯いていた顔を上げると、里の人たちは過去に思いを馳せるような目をしていて、

心の中にある痛みに対し、覚悟を決めたような顔つきだった。

「たった一人で、孤独から抜けようと戦っていた優しい厄神様と、それ

を愚かにも拒絶していた人間たちの話を」

そう前置きをして、己の罪を告白するように、里の人たちは語ってくれました。かつて、他人と交流したいと、ただただ他人から友達になりたいと、そう願っていた厄神様のこと。そして、思い込みと先入観から拒絶してしまった、愚かな人間たちの話を。

広場を後にした私と雛さんは雛さんの案内で寺子屋に向かうことになった。人外でありながら人里に出入りする以上、人里の守護者とも呼ばれている半人半妖とは面識があったほうがいいという判断から紹介してくれるとのことだった。

雛さんの後ろを歩きながら、私はさっきの里人たちの話に思考を巡らせていた。

孤独から抜け出したくて、拒絶されようとも必死に手を伸ばし続けたという雛さん。

ふと、自分のことを振り返ってみる。自分には幽々子様や祖父がいるから孤独とは無縁だった。幽々様がいる、お祖父ちゃんがいて、たまに紫様が遊びに来て。

……………ん？

ふと、思う。自分には友人と呼べる知り合いがいるのだろうか、と。幽々子様は仕える主人であり友達ではない。紫様は主人の友人という位置付けであり、紫様の従者である藍さんと橙は……従者仲間で

はあれど友達という関係ではない気がする。

じゃあ今回の異変で知り合った面々は……まだ知り合ったばかりで友人と呼べるか怪しいところ。

——あれ？……もしかして私、友達がない？

前を歩く雛さんが凄く偉大な人にみえる。それに比べて私は………なんだか急に悲しくなってきた。あと、なんだか視界がぼやけてきたような……。

——い、いえ！今いないなら作ってしまえばいいんです！雛さんは優しいですしすぐにお友達になってもらえるのでは？異変でのことがあるからすぐに領いてもらえるか分からないけれど、雛さんだって孤独から抜け出すために頑張ってたじゃないか！頑張れ、私!!

悲しみと焦りから変なテンションになった私は、今いる場所が人里の大通りだということも忘れて雛さんに声をかけていた。

「あ、あの、雛さん！」

「ん？どうしたの、妖夢」

「雛さん！わ、私と………お、お友達になってください!!」

——そうして、私の言葉を受け取った雛さんは——

——少し怪訝そうな顔をしていた。

雛さんが浮かべたその表情に私は、やっぱりいきなりはダメだったか、と悟った。

………そうですよ。初対面で話も聞かずに襲いかかった人といきなり友達なんて虫が良すぎますよね。今私を案内してるのだから霊夢さんに頼まれたからで、私から頼まれただけだったら拒絶されなくても全然おかしくな——

「………っ………私はもう妖夢と友達だと思っただけだけど………違った？」

「ツ!!……いい、いえ!お友達でいさせてください!!」
——違った。

この人は既に、異変でのことなどこれっぽっちも気にせず、私を友と認識してくれていた。慌てて言葉を返せば、返ってきたのは純粹な一言。

「もちろん!」

そうして向けられたその笑顔に、この人が幅広く慕われる理由を見た気がした。

雛さんのことを、少しは理解できた気がしました。

この日、初めての友人ができた。

「よっしやあ!!我らが雛様に新しいご友人ができたぞ!!祭りだ祭り!!!」

「うおおおおお!!!」

「ええ!?ええ、ちよ、ちよつと待ってください……、い、いったいなにが始まって、ええええええええええ!」

……逆、人里は理解から少し遠ざかりました。

春を告げる

人里に妖夢を案内した翌日、私は霧の湖を訪れていた。特に理由があるわけではなく、強いていえば『なんとなく』だ。

ただまあ、霧の湖に来れば当然、エンカウトする相手が居るわけ
で――

「あつ、雛だー!」

「こんにちは、雛さん」

――むしろエンカウトしに来ているわけで。

というわけで、お相手は氷精のチルノと大ちゃんこと大妖精。現在は湖の畔に倒れていた木に座ってピクニック気分でおしゃべり中。

――ところで、一定時間ごとに交互に私の膝に乗ってくるのはなんで?」

ちなみにお茶請けは昨日人里で押し付け^られた桜餅^たである。

「~~~~ッ!この桜餅おいしいです!!」

一口食べた瞬間から大ちゃんが物凄い幸せそうな顔をしてくれた。逆にチルノは一言も喋らずひたすら桜餅を口に詰め込んでいる。

「そういえば雛さん、リリーちゃん見てないですか?」

「リリーを?」

話題がお菓子から他の妖精達に移ったところで大ちゃんが心配そうな表情をした。

「せっかく春が戻ってきたのに、まだリリーちゃんを見かけてないんです。ちよつと……心配で」

「んー、あたいはあいつのことだからその辺飛んでは思うけどなー」
一方のチルノは心配とは無縁らしくあっさりとしている。もしかしたらリリーへの信頼からくる言動なのかもしれないが、それはチルノ本人にしかわからない。とはいえ大ちゃんをこのままにできないと思ったのか、ふと思いついたようにこちらを向き――

「じゃあ雛！あいつ呼んできてよ!!」

——無邪気にチルノが提案した。

「いや、ちよつ——」

「大ちゃん!!雛ならあつという間に呼んできてくれるつて!」

「本当ですか!？」

制止する間もなくチルノはハードルを上げ、大ちゃんは目をキラキラさせてこちらを見つめてくる。

——ああ、信頼と期待の視線が刺さる。

ただ、ちよつと待つてほしい。リリーことリリーホワイトは、妖精なだけあって確かに危険度はそこまでではないし、実際私とも友好的に接してくれる人妖の一人だ。

しかし、問題は現在が春であるという一点に尽きる。

種族が春告精なだけあって毎年この時期は春を告げながら幻想郷中を飛び回っているのだが、春であることが嬉しさのあまり興奮して一度冷静さを失うと無意識に弾幕を周りにバラまく癖がある。

そんな相手に対してこの私を向かわせるの？

弾幕(つこ)不得意

——いや、私でもこの時期のはしゃいでるリリーを捕まえるのはちよつとしんどいんだけど……。

私は微かな抵抗とばかりに言い訳じみた説得を試みたものの、状況が分かっているのかいないのか、チルノは何の問題もないと笑顔で私を送り出した。

「だいじょーぶ！雛から頼めばいっぱつよ!!」

そんなこんなでとりあえず私はリリーが住処としている巨木の前までやって来た。住処と言っても周りからはただの巨木に見えてい

るのだが、私にはしつかりと巨木の中を切り抜いて作られた家が見える。妖精達が自然の事象の体现であるからか、妖精達の住処は確かにそこに存在するにも関わらず、認識するのが難しい。どんな理屈かはわからないが、普通に存在する自然の一部——例えば木や土など——に見えてしまう。

しかし、何事にも例外はあるもので、その自然の中の家を住処としている妖精に案内されその住処を認識した者は、以後その住処を普通に見ることができるようになるらしい。

かくいう私もその内の一人というわけだ。

——まあ、私が此処を知ったのは去年の春にハシヤギすぎて紅白の巫女さんに弾幕ごっこでボロボロにされたリリーを送り届けることがあったからなのだが。

とりあえず家の中にリリーが居ることを願って呼びかけてみることにする。

「リリー？いるー？」

少しして、木製のドアがゆつつつくりと時間をかけて開いていく。ドアをほんの少し開いた先にはなぜか目を固く閉じている白いパジャマ姿のリリーがいた。

「リリー？」

なぜ目を閉じているのか問いかけようとしたところで、リリーは突然目を開けるとポツリと呟いた。

「あった、かい？」

ドアの隙間から顔を出したリリーは、ゆっくり首を動かして周囲を確認している。リリーの顔は、絶望の中で一筋の光を見つけたような表情をしていた。

いかにも恐る恐るといった様子でリリーが問いかけてくる。

「はる、です……か？」

「う、うん。今は春だよ……？」

——そんなことは春告精が一番分かっているだろうに。

とりあえずといった形で私が答えた直後、リリーの変化は劇的だった。

——じわつと大粒の涙が浮かび、

——恐怖から解放されたかのように安堵した表情をし、

——最後に泣き笑いの表情で息をおもいつきり吸って……

「はる……です……よ……——！！！！」

あまりの大音量に一瞬完全に意識が飛んだ。

「うっ、あう、ぐずっ、よ、よがっだよ〜！」

いきなり大声を間近で受けて意識がハッキリせず、ブーツとした頭で私ができることは、泣きながら抱きついてくるリリーの頭を撫でて落ち着かせることだけだった。

春告精、リリーホワイトが「さすがにおかしい」と確信したのは4月上旬のことだった。例年では如何に春の訪れが遅くともそろそろ桜が咲き始めていてもおかしくはないのだが、今年は未だに雪がたんまりと積もっている状況だった。

それからリリーは春を探して幻想郷中を飛び回った。普段から遊びに行く場所も普段は足を伸ばさない場所も、時には冷たい雪をひたすらに掻き分けてまで探し回った。

「はる……どこ……どこ……です、かぁ」

しかして春は一向に見つからず、心なしか降り積もる雪は増えているような気がしていた。

春を求めて幻想郷中をさまよって、1ヶ月。挙げ句の果てに魔法の森に向かつていく紅白と白黒とメイドに蹴散らされ、ことここに至って、リリーは希望を持ち続けることができなくなった。

リリーホワイトは春告精である。妖精は自然の概念から発生するものであり、春告精である以上、リリーは春から生まれているも同然だった。

逆にいえば……………

自然の概念がなくなるということは、当然その概念を元にした妖精の消滅も意味している。そして、春がなくなるということはつまり……………

「——ッ!!」

リリーはそこまで考え、そこから先を考えることをやめた。

住処に戻ったりリリーは真っ白な外の景色が視界に入らないようドアも窓もカーテンも締め切り、ベッドの中でひたすら逃避した。それだけが、今のリリーにできる唯一の抵抗だった。

そんなリリーの元に来客があつたのは、リリーが閉じ籠つて一週間がたった頃だった。

「リリー？…いるー？」

外から聞こえてくるのは『人里の守り神』こと鍵山雛の声。居留守を使うことも考えたが、雛に会えるのが最後になるかもしれないと考えると会わないという選択肢は消えていった。恐る恐るドアに近づき、外の景色を見ないように、リリーは目を固くつぶりながらゆっくりと扉を開けた。

「リリー？」

雛の声と共に感じられる空気に暖かさを感じて、リリーは思わず目を開けた。

「あつた、かい？」

春の陽気がじんわりとリリーに染み込んでいく。辺りを見回しても雪は何処にも残っておらず、綺麗に咲いている花たちが季節は春だと主張していた。

「はる、です……か？」

「う、うん。今は春だよ……」

思わず雛に問いかけてみれば、戸惑いながらも記憶と変わらない穏やかな声音が答えをくれる。

ここにきてようやく季節が春を迎えたと実感できたりりーは……

「はる、です、よ、——！！！！」

ようやく、ようやく、春告精としての本懐を遂げることができたのだった。

なぜか号泣しているリリーをなんとか落ち着かせてからチルノに遊ばないかと誘われていると伝えれば、即座にYESの回答が返ってきた。

そして現在、いつもの服装に着替えたリリーに腕や背中に抱きつかれながらの移動になっている。

「あの、リリー？……リリーさん？動きづらいから離れてくれませんか？」

「〜♪」

結局、何を言ってもリリーの態度は変わらず、終始リリーに抱きつかれながら霧の湖を目指すことになった。

「春ですよ〜♪」

——まあ、リリーが楽しそうにしているし、いつか。

余談ではあるが……………

リリーと共にチルノ達と合流したところ、抱っこされているリリーを見たチルノが開口一番『ズルい!!』と叫び、大ちゃんがもの凄く期待を込めた瞳で見つめてきた。

この後妖精達をメチャクチャ抱っこすることになった。